
おにぎりのみこ

紫焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おにぎりのみこ

【Nコード】

N7502I

【作者名】

紫焔

【あらすじ】

仕事がクビになった深夜の帰り道、出逢った少女は巫女服を着ていた。

少女はゆるりと言葉を紡ぐ。

「私は、おにぎりのみこです」

そうして始まる青年と少女の現代伝奇的物語。

物語の性質上残酷描写等がある事が確定ですので閲覧の際はご注意ください。

現在不定期更新です。

第一話

ニツカポツカを穿き、見るからに土木の仕事をしていると言った様子の青年、窪塚皓は夜道を歩く。

手にはコンビニの袋を持ち怒っている様な、苛々している様な歩調だ。

「あー………つたく、急にクビとか言うなよなあ」

思わず皓は独り言を零し、足元にあった小石を蹴とばす。

コンビニ袋に入っている物がその動きに合わせて揺れ、皓はますます深い溜息をついて袋を持ち直して帰路を歩く。

電球が切れかけた街灯が照らす道を歩いていると、ふっと柔らかくな匂いを感じ思わず足を止める。

きよるきよるつと左右を見回すが、塀やマンションの壁ぐらいいか見え匂いの元が無い。

気のせいかと首を傾げながら青年が前を向くと、目を見開く。

先ほどまで、自分の前には誰も居なかった。

だがしかし、自分の前方。

壊れた街灯の下に、白い人影が居たのだ。

深夜で、深い海の底に居る様な静寂を湛える住宅街。

まるで怪談に語られるワンシーンの様なこの状況に、皓は思わず生唾を飲み込む。

だがすぐに、皓は腹を括って白い人影を良く見ようと目を凝らすと、人影が静々と歩きだす。

一瞬腰が引けそうになったが、よくよく眼を凝らして見ると人影には足があった。

それどころか、この時間にこの辺りを歩いている可能性など皆無な格好をしていた。

思わず唾然と、皓は人影を凝視する。

静々と、人影は皓と同じ街灯の下に立つ。

その姿は緋袴に白い着物で、長く垂れた白い着物の下の緋袴が透けて見える。

見紛う事の無い、巫女がいた。

しかも、その巫女が自分の目の前で足を止めたのだから、たまったものでは無い。

皓は道を開けた方が良さそうだと判断し、退けようとした瞬間に巫女が顔を上げる。

その顔を見た皓は、息を飲む。

今時無いくらい真っ直ぐな、艶やかで鴉の濡れ羽色の様な黒髪。

白磁の様に白い肌に、すっと通った鼻筋。

やや切れ長の目と、紺碧の瞳が真っ直ぐに見上げてくる。

まるで三日月の様な、触れれば切れる氷刃の様な美貌を持つ少女だった。

美しいと思うと同時に、畏怖を覚えるその少女の瞳を、吸いこまれる様な心持で皓は見つめていた。

すると、白磁の頬が僅かに朱色に染まる。

ほんの少しだけ、恥ずかしそうに紺碧の瞳が逸らされる。

その瞬間、皓は知らず止めていた息を吐きだし正気に戻る。

同時に、何故自分がこんな美少女な巫女さんに見上げられなければいけないのかと疑問を覚えた。

「ばんわ」

取り敢えず、皓はそう声をかける。

少女は数度瞬きをしてから、微笑みを浮かべる。

「こんにちは」

まるで金の鈴を転がした様な声、と言う表現がぴったりな声で少女は返事をする。

浮かべた微笑みもその冴えた美貌に似合わず暖かいもので、皓は肩の力が抜けた様に楽になった気がした。

そんな自分に思わず苦笑を浮かべつつ、皓は口を開く。

「んで、この辺になんか用事でもあるのか？ 神社とかは確か、無

かったはずだけどよ」

皓の素朴な疑問に、少女はまたしても数度瞬きをする。

その仕草はおっとりとしていて、この少女の外見とはかけ離れている様な気がすると皓は思いつつ、返事を待つ。

すると、ゆっくりと少女の頬が赤く染まっていく。

瞳が潤み、恥ずかしそうに視線を彷徨わせ始め、もじもじと白い上着の部分を弄りながら桜色の唇を開く。

「あの……」

目の前で何やら恥じらい始めた美少女の姿に、皓も何やら照れくささを感じ始め顔に熱が集まってくる。

その上、化粧品が無いくせに桜色した唇が酷く色気がある様に感じ、彼女の居ない彼には酷く刺激が強い。

一瞬、唇を奪いたいという衝動が生まれたが、少女が言葉を発した事でなんとかその衝動を堪えた。

「な、なんだ？」

言葉の続きを促そうと問いかけると、少女は酷く恥ずかしそうにしかし嬉しそうな表情を浮かべて皓を見上げる。

真摯に、真つ直ぐに見詰めながら。

「私と、契約してください」

と、言葉を紡いだ。

「……は？」

甘やかな言葉と勘違いする様な表情と声音で言われ、皓は言葉の意味を理解できなかった。

思わず問い返すと、少女はますます恥ずかしそうな表情を浮かべつつもう一度口を開く。

「私と、契約してください」

先ほどと同じ言葉を紡ぎ、少女は一世一代の告白をしたかのように真つ赤になる。

だが皓は、恥じらいで真つ赤になる少女が口にした言葉により、新手の新興宗教の勧誘なのかと思い、胡散臭いと思わず眉を顰める。

「……あ〜……悪いけど俺、宗教とかには興味がねえんだ」

取り敢えず声をかけた自分に後悔しつつ、皓はそう言っつて少女の横をすり抜けようとする。

だが。

「あつ、待ってください！」

と、少女は必死で皓の腕を取る。

自分の胸ほどしかない少女は皓の腕を胸に抱え、一生懸命引きとめる。

「私はおにぎりのみこなのです！ だから、あなたに契約してもらわないと困るのです！」

瞳に涙を溜め、一生懸命言い募る少女。

物凄く伶俐な美少女なのに、言葉遣いの幼さと言っている台詞が激しく怪しいのであまり関わり合いになりたくない。

「俺は宗教とかは興味ねえんだから、他のやつに頼め！ だいたい、なんでおにぎりなんかには巫女が居るんだよ！」

思わず、少女の言葉に突っ込みを入れると少女はぶんぶんと頭を振る。

「違います！ おにぎりのみこです！」

華奢な少女が一生懸命訴えながら、ぎゅゅと抱えた腕を抱き締める。

少女の胸は布か何かで潰されているのか、余り柔らかな感触がない。

だがしかし、そんな抱え方をされる事自体が滅多に無いので、皓は一瞬動きを止める。

その動きに、話を聞いてもらえると勘違いしたのか少女は顔を輝かせる。

「契約、してください！ あなたじゃないとだめなんです！」

頑張っつて言い募る少女の言葉は、まるで愛の告白の様で皓の頬に一気に血が上る。

「まっ、待てや！ 初対面のやつにそんな事言われる覚えはねえぞ

！」
涙さえ浮かべて見つめてくる美少女に、赤くなりながら皓は怒鳴りつけて体を離すべく腕を払う。

「うあっ」

小さな声を上げ、少女は振り払われペタンと地面に尻もちをつく。皓は思わず取った自分の行動で少女が転んでしまった事にしまったと腕を伸ばしかけるが、必死で自制する。

少女にまた腕を取られるのは、正直勘弁してもらいたい。

深夜の住宅街で怪しい勧誘を受けて困っているわけだが、傍から見たらコスプレプレイをしているカップルだと勘違いされかねないからだ。

皓はうるうると瞳を潤ませ、眉尻を下げた美少女に罪悪感を抱きつつも口を開く。

「と、とにかく。俺には宗教は興味ねえし、てめえとその……契約つついのをするつもりはねえ」

動揺を押し隠す様に呼吸を整えながら、皓は少女をひたと見据える。

「見た所、中学……高校生だろ？　こんな時間にそんな恰好でウロウロしたら、親が心配するぞ。さっさと帰って、宗教から……」

皓は思わず要らない事と思いつつも、少女を諭し始めると少女の表情が変わる。

「いけない」

険しい表情で素早く立ち上がり、皓の腕を掴む。

「お、おい！　人の話を……」

「早く、移動しなきゃ……！」

少女の酷く緊迫した声に言葉を遮られ、皓は一体何があるのかと問おうとするが、少女が駆けだす。

草履だと言うのにかなりの足の速さで、皓は驚きながらも一緒に走る。

いや、走らなければならぬと本能が訴えたのだ。

酷く不吉な何かが、後ろから追いかけてくる感覚。

後ろを振り返れば凶暴な肉食獣に追いつかれ、食い殺されてしまうと錯覚する異様な殺気が迸っていた。

皓の背中は冷たい汗が流れ、このまま走り続けていてもいずれは追いつかれてしまうことを直感してしまうほどだ。

少女は皓の顔を見てから数度頷き、走りながら懐から鈴を取り出し皓に差し出す。

「これ、持っていてください。これがあれば、あなたは大丈夫ですから」

息を切らせながら、少女がぼわんと微笑む。

何故か、少女のその言葉と微笑みに魅せられたように皓はその鈴を受け取る。

少女はその行動にほっと安堵した表情を浮かべてから、思い出したように口を開く。

「私は、木崎静那です。私が生きていたら、契約してくださいね」
笑顔で聞き捨てならない事を言われ、皓が目を見開くと同時に少女は腕を離し、足を止めて振り返る。

「おにぎりはこちら！」
後ろの何かにそう怒鳴りつけ、少女は柏手を打つ。

その、小さいはずの音だけで、何故か不快な感覚が薄れた皓は足を止めて振り返る。

木崎静那と名乗った少女の向こう側に、巨大な犬の様な動物が荒息をつきながら彼女に向けて前足を振りおろそうとしていた。

「あぶねえ！」
思わずそう怒鳴り、皓は静那を助けようと駆けだす。

だが、静那は振り下ろされる前足を数歩下がるだけで避け、素早く印を結ぶ。

「おにぎりは、おにに殺されない。おにぎりは、おにの悪を滅すもの」

もう数度、複雑に手を動かしてから静那は刀印を結ぶ。

そこに、皓が静那の傍に駆け寄り肩を掴む。

皓の行動に静那は驚き、振り返る。

「どうしました？」

目の前に巨大な化け物が居ると言うのに、静那はキョトンとした表情を浮かべて小首を傾げる。

「ど、如何しましたって……っ!？」

呑気な言葉に言葉を詰まらせると、皓は顔を上げて気がつく。

化け物の四肢には青白い光の輪が嵌り、身動きが出来ない状態になっっていた。

そのせいか、化け物は怯えに似た色を目に浮かべて静那を見下ろしている。

静那は肩を掴む皓の手にそっと自分の手を添え、笑顔を浮かべる。

「そのまま、肩をつかんでいてください」

無垢な笑顔で言われ、皓は何故かを問おうとしようとしたが静那が前を向いてしまう。

凜とした横顔を見せ、静那は口を開く。

「おにぎりは、おにを浄化するもの」

刀印を結んだ手を上げ、裂帛の気合いを入れて振り降ろす。

瞬間、静那の手から青い光が放たれ、化け物の体を切り裂く。

切り裂かれた事で化け物は黒い霧へと変わり、徐々に色を変えていく。

黒から灰色、灰色から白へと。

その変化と同時に、周囲に立ち込めていた何とも言えない重苦しい空気が次第に清浄なものへと変わって行った。

それを間近で見っていた皓は呆然とした表情を浮かべながら、静那の肩を掴んだまま眺めていた。

静那はふうと息を吐き、皓を見て顔色を変える。

「あっ、ああ！」

静那の驚いた声に皓は正気に戻るが酷い目眩を感じ、同時に意識が途切れてしまった。

第一話（後書き）

この小説は、自サイトにて連載している物です。
月一の更新予定ですが、楽しんでくださると大変嬉しいです。

第二話（前書き）

ちょっとエッチな描写がありますので、お気を付け下さい。

第二話

目覚まし時計の音が鳴り響き、皓ははっと目を覚ます。

何時もより重い体と頭を振りながら、ベッドサイドに置いてある目覚ましを止めて時間を確認する。

「……こんな早く起きても仕方がねえじゃねえか」

惘然と呟き、深い溜息をつきつつごそごそと布団の中に潜る。

先ほどまで、物凄く良い夢を見ていたのだ。

数年前に別れた彼女を抱く夢で、現実ではしなかったような可愛らしい反応をしてくれていたのだ。

折角楽しんでいたと言うのに、目覚まし時計で邪魔された事が腹立たしい。

まったくと呟きながら寝返りを打つと、布団の中がごそごそと動き出しギョツと目を見開く。

その彼の前に、ずるっと布団の中から白い手が現れる。

「だっ……誰だ!？」

そう誰何し布団を捲りあげると、真っ直ぐな黒髪を乱した少女が寝ぼけた表情で体を起こす。

「おはようございます」

何処か舌足らずな口調でそう言い、ぶかぶかのTシャツを着たままペタリと子供の様に座る。

その姿に、視線が釘付けになる。

寝ぼけ眼でも彼女はかなりの美少女で、しかもかなり凄い格好をしていた。

すらりとした白い脚と、柔らかかそうな胸が布地を押し上げている光景は激しく本能を刺激する。

皓は思わず喉を鳴らし、生唾を飲み込んでしまう。

そんな彼に気がつかず、静那はゆっくりと瞬きをしてポンと手を叩く。

「勝手におじやまして、申し訳ありませんでした」

あまり慌てた様子も見せず、頭を下げる静那。

「あつ……あぁ」

こくこくと皓は頷き、次いではっと正気づく。

「な、なんでお前がここに居るんだ？」

皓がそう問いかけると、静那はぼわんとした笑みを浮かべる。

「昨夜、はは様がつけてくださった方がこちらのお住まいを見つけてくださったのです。旦那様は瘴気にあてられ、気絶されてしまいましたし」

ニコニコと笑いながら告げられた言葉に、皓は目を剥く。

「ちよつ……ちよつと待てえ！」

思わず皓は叫び、室内をきよろきよろと見回す。

部屋の中は猫がいる以外には特に変わった様子はなく、静那と自分しかいない事を確認する。

「つて、猫!？」

耳が折れ、丸い顔に低い鼻をしたその猫はスコティッシュフォールドと呼ばれる種で、大変愛らしい。

自分は猫など飼えるほど裕福では無く、まして血統付きだと普通に六桁でないと購入できない品種だ。

そんな猫が何故こんな所にと、他にも色々と突っ込みを入れない事をすっかり忘れて猫を凝視する。

円らな瞳でじーっと皓を見つめる猫は、一つ欠伸をして耳を掻く。その愛らしい仕草に隣の静那はほにやんと笑いベッドを降り、皓の視線を遮るように猫の居る窓際に歩いて行く。

背筋をしゃんと伸ばし、凜とした風情を見せる後ろ姿だが、真白いシャツが日差しに透けて彼女の体の線を露わにしている。

思わずそちらを凝視した瞬間。

「あつ!？」

と言う静那の声が聞こえたと同時に、どすつと音を立てて猫が腹に突っ込んできた。

「がふっ！」

思わず呻き、重い衝撃を受けた腹を見る皓。

そこには尻尾を膨らませ、とても可愛らしい顔で威嚇する猫が鎮座ましましていた。

皓はごほつと咳きこみながら猫に手を伸ばすが、威嚇音と共に猫パンチを食らってしまふ。

「ああ……駄目、そう言うことしちゃ」

そう言いながら、静那は猫を抱き上げてにつこりと微笑む。

「旦那様、大丈夫ですか？」

小首を傾げ、そう問いかける静那。

「……あのよ、ええつと……木崎、だっけ？」

旦那様と呼びかけられた事に辟易した表情を浮かべ、皓は何とか深呼吸をして自分のペースを取り戻そうと声をかける。

皓の問いかけにはいと頷き、居住まいを正す様に床に正座して猫を降ろす。

真つ直ぐに、邪気なく見上げてくる静那の視線に何故か居たたまれない様な気持になりながら、口を開く。

「お前、何なんだ？」

起きぬけから色々とおつたが、昨夜の事を徐々に思い出しそう問いかける。

「私は、おにぎりのみこです」

静那の返事にむうつと眉を顰め、皓は眉間を揉む。

「ああ……いや、そうじゃなくてよ」

昨夜の出来事をきちんと聞きたいが、どの様にして問うべきかを悩んでいると静那はその顔に似合わない邪気の無い微笑みを浮かべる。

「旦那様のお名前は、なんというのですか？」

何処か無邪気な問いかけに、皓は啞然とした表情を浮かべてから、次いで頭を抱える。

「おま、おまえ！ 名前も知らない人間の家にそんな恰好して泊ま

るのかよ!？」

呻くように言つと、静那はキョトンとした表情を浮かべて小首を傾げる。

「私、ねまきをもっていなかったのでお借りしたのです」

返事になっていない返事をされ、皓は頭痛がしてきたと思った瞬間。

「それに、旦那様以外の方とどうきんしませんから」

にっこりと、極上の笑顔でとんでもない事をさらりと言つてのける静那。

今まで、これほどストレートに言われた事の無い皓は思わず赤面してしまう。

「あつ……のなあ……」

赤面しつつ、思わず静那の姿を上から下まで見てしまうのは、男の本能であろう。

だが、その仕草を見てとつたらしい猫が静那の柔らかかそうな膝の上に乗る、キロリと皓を睨みつける。

猫のその、まるで人の言葉が分かる様な行動に眉をひそめつつ咳払いをして、きつちりと聞きたい事を言おうと決める。

「……あー、まあ。俺の名前は窪塚皓だ。んでまあ、木崎は何で俺なんかが良いって言うんだ？ それに、俺の家を調べて連れてきた奴は何処に行った？」

一気に、静那や猫に邪魔されない様に問いかける皓。

静那はゆっくりと瞬きをしており、彼女の膝に居る猫の尻尾はゆらりと揺れる。

「見てられないですね」

ため息交じりに、第三者の声の不意に割り込む。

「は？」

皓は、誰が声を上げたのかときよるきよると部屋の中を見回す。

「まったく、鈍い人ですね」

無然と呟く声は、静那の方から聞こえてくる。

第二話（後書き）

月一とか言いながら、いきなり更新してしまいました。

今回長すぎると思い、途中で切ったので物凄く中途半端かもしれません。

また、基本的に詰め詰めで書いておりますので、読み辛いや誤字脱字等がございましたらご一報くださるとありがたいです。

第三話

皓が静那を見ると、静那はにこつと微笑み膝の猫を抱きあげる。

「旦那様、はは様の使い魔です」

スコティッシュフォールドは静那の紹介に、抱えられたまま胸を張って皓を見る。

「ええ、わたしはお嬢様を護るために主から遣わされた使い魔の……」

「たまです」

スコティッシュフォールドの名乗りをのほほんと遮り、静那は笑顔のまま紹介する。

「お嬢様！ だから、わたしはタマではないと！」

「はは様はたまと呼んでいます」

何処まで行ってもマイペースな口調で、焦る使い魔の紹介をする静那。

取り敢えず、人語を喋る猫を見て、次いでぼわんと笑顔を浮かべる静那を見る。

この、自分の常識を悉く壊すような存在をどの様にして認め、話をするかを皓が悩んでいると猫がむつと唸る。

「お話がずれましたね。取り敢えず、窪塚殿にはわたしからきちんと説明いたします。お嬢様だと、お話が進まない可能性がございますからね」

取り敢えず、名前の話題から離れようとタマと呼ばれたスコティッシュフォールドは咳払いをしながらそう言う。

「あ、ああ……」

皓は何が何やらと言った表情を浮かべながら頷き、静那は白い太腿にタマを乗せる。

だが、タマはすぐさま顔を上げ、静那に向かって尻尾を揺らしながら言う。

「お嬢様は、ひとまずお着替えをなさってください。あちらの方に、お服を用意しておりますゆえ」

静那はタマの言葉に素直にはいと返事をして、ぶかぶかの白いTシャツ一枚のまま隣のリビングへと入っていく。

その姿を唾然と見送る皓に、タマが咳払いをして注意を引く。

「さて、婿殿」

徐に、皓にとって激しく聞き捨てならない言葉が出てくる。

「ちよつと待て！ 何で婿なんだ？」

それじゃなくても様々な突っ込みどころがあるのに、普通に突っ込みを入れられたのがこの言葉だけなのに少し悲しくなりながら、

皓は問いかける。

「あ、ええ……まあ、婿殿は一般人なんですから最初から説明するべきなのでしょうね」

ふむと、タマは頷く。

だから、何故婿なのかと突っ込みを入れようとする皓。

しかし、それに先んじる様にタマは口を開く。

「まず、昨夜の事は覚えておられますか？」

出鼻を挫く様に問いかけられ、皓は慥然としたまま頷くと同時に思いつく。

「ああ……って、そうだ。あれ、何なんだ？」

自分の知らない世界を垣間見たと自信を持って言えるほど、異質なモノだった。

あの時のあの化け物を思い出せば、ぞわりと鳥肌が立つ。

そんな皓の姿にタマはゆらゆらと尻尾を揺らし、ぱちぱちと瞬きをする。

随分と愛らしい仕草に微妙に緊張感を削がれながら、皓はタマの返事を待つ。

「アレは、悪しきもの。木崎では鬼と呼んでいるものです」

タマの言葉に一瞬何を言っているのかと突っ込みを入れようとしたが、皓はすぐに止める。

あの時見た異形は、そう呼ばれるに足る存在であると本能が訴えるのだ。

「ごくりと息を飲んだ皓に、タマは前足で顔を洗いながら言う。

「そして、木崎の家は鬼を退治する事を生業としております」

タマの説明に、なるほどと皓は頷く。

しかし、すぐに首を傾げる。

「それでなんで、俺が婿なんて呼ばれなきゃなんないんだ？ それ以前に、なんでお前らが俺の家に居て寛いでるんだよ」

普通に突っ込みを入れると、タマは尻尾を揺らして半眼になる。

「今、ご説明いたしますゆえ黙ってお聞きください。それじゃなくても、お嬢様の要領の得ないご説明に混乱なさっておいででしょうし」

ぴしゃりとタマに怒られ、皓はむっとした表情を浮かべる。

キロリと睨むタマと、皓は睨みあう。

そこにのほほんと。

「これがブラジャーと言うものですか……胸が、きついです」と、静那が誰かと話をしている声が割り込む。

皓は思わずその静那の姿を想像して口と鼻を押さえ、タマが小さく咳払いをする。

「木崎は鬼を退治する事が生業と言いましたが、その手段が少々特殊なのです」

話を戻す様にタマは言い、皓もそれに乗る。

「特殊って昨日、木崎がした様な事だろ？」

皓の質問に、タマは頭を振る。

「いえ。あれは素質さえあれば誰もが身につける事が出来る術です」
タマの言葉にへえっと声を上げる皓。

「十分特殊だと思っただがなあ」

とぼやくと、タマは尻尾をゆらゆらと動かしそつと嘆息する。

「そうですね、婿殿は一般人ですからそう思いますよね」

何やら嘆くように言われ、皓はむっと唸る。

「なんで俺が、お前に嘆かれねえといけねえんだよ」

中々本題に入らない為ぎろりと睨みつけると、タマはぱちぱちと瞬きをして口を開く。

「木崎の長子はその身を退魔の武器へと変じる事が出来るのです。その為、己れを振るう事のできる伴侶を探し出し、契約をするのです」

何やら焦った様にタマは一気に言い切り、皓は眉を顰める。

「……ああ？」

言われた内容があまりにも非常識で、皓は思わず苦笑してしまう。

「人間が武器になるって……そんなバカな事あるわけねえだろ」

呆れ交じりの言葉に、タマは眉根を寄せる。

「信じていただけなくては、困ります。何せ、お嬢様が選んだのは貴方なのですから」

タマの言葉に再び眉を寄せ、眉間に深い皺を刻みつつタマを見る。

「俺？」

そう確認する皓に、タマは頷く。

「はい。貴方です、婿殿」

あっさりとは肯定され、皓は思わず噴き出す。

「ぶは！ 待て待て……俺、鬼とかお前みたいなやつ昨日と今日で初めて知ったんだぞ？ そんな俺が出来るわけねえ」

笑いながら手を振るが、タマは真っ直ぐに皓を見る。

「そのような事は、関係ありません。お嬢様が選んだ事こそが、重要なのです」

真剣な言葉に、皓は何とか笑いを納めタマを見る。

「如何言う意味だ？ それ」

皓の問いかけに、タマはゆらゆらと尻尾を揺らす。

「木崎の長子は、自身の力と魂の格に見合った方を選ぶ習性を持っております。いえ、本能と言うしかありませんね」

タマの言葉にひくりと引きつった表情を浮かべ、皓はタマの前足の下を持って顔を寄せ、すぐみながら口を開く。

「それは、拒否できねえのか？」

皓の問いかけに、タマは平然と頷く。

「無論。お嬢様にとって貴方は担い手であると同時に、伴侶です。特に、木崎はその成り立ちから二君に仕える事など出来ません」

タマの額に額をぐりぐり押しつけながら、青筋を浮かべつつ皓は怒鳴りつける。

「んなもん、関係ねえ！ 何で俺がそんなっ……!!」

八つ当たりする様にタマの額をぐりぐりしていると、タマがバタバタ暴れ出す。

「痛い痛い！」

抗議の声を上げるタマに、皓は怒鳴り返す。

「うるせえ！ とりあえず俺はそんなもんならねえぞ！ 強制されるのなんざ、ご免だ！」

更にタマを苛めようとした時、扉が開く。

そこには切れ長の目を持ち、何故か頭の上に灰色の犬の耳を乗せた美女が立っていた。

目を丸くして美女を凝視していると、彼女は皓の手元を見る。

「……タマ、サボりは良くないぞ」

静かに言くと、タマがバタバタと暴れる。

「タマじゃないと言っているでしょう！？ それよりポチ、お嬢様の身支度は終わったのですか？」

ポチと呼ばれた美女は頷き、すつと横に退ける。

「あっ……ぼち、いきなり避けるのは……」

恥ずかしそうな声音でオロオロしているのは、普通の服を着た静那である。

長い髪をポニーテールにして、白い長袖のシャツを着て膝丈の紺のフレアスカートを穿いた静那が恥ずかしそうに入ってくる。

黒いソックスを履き、紺のタータンチェックのシヨールを羽織っている。

昨夜見た神聖な巫女と言った雰囲気でも無く、先ほど見た酷く露

出した姿でも無い彼女は新鮮だ。

と同時に、恥ずかしがるのはさっきの格好の方ではと内心突っ込みを入れつつ静那と美女を見る皓。

「婿殿、タマを離してやってくれまいか」

ハスキーな声音で犬耳をつけた美女が言い、皓はこくこくと頷きタマからぱつと手を離す。

タマは器用に床に降り、ポチと呼ばれた美女に頷きかける。

「お嬢」

静那を促し、皓の真正面に座らせてからポチは静那のやや後方に腰を降ろす。

まるで忠犬と言った雰囲気を持つ彼女はタマを見て、タマもまた頷きながら口を開く。

「こちらはポチ、お嬢様のお父様の使い魔です」

タマに紹介されたポチは小さく会釈し、皓も釣られたように会釈をする。

二人が顔を上げた時、タマがユラユラと尻尾を揺らしながら口を開く。

「お嬢様のお父様も、元は婿殿と同じく一般の方です」

タマの言葉に、皓はきよとした表情を浮かべる。

「はあ？」

思わず問い返すと、静那がにっこりと笑う。

「とと様も、はは様と契約するまでは何もごぞんじなかったそうです」

のほほんとした静那の答えに、皓はひくりと口元を引きつらせる。

「……あんな魑魅魍魎が跳梁跋扈するような世界には、足を踏み入れたくねえんだが」

そう言つと、タマが静那の横にちょこんと座って半眼になる。

「なんと意気地の無い……視線にも“力”があり、お嬢様との格も相性も今まで見てきた者達の中でダントツで良いと言つのに」

揶揄する様な声音でタマが言つと、なにいと片眉を跳ね上げる皓。

「俺の何処が意気地がねえってんだ、ああ!？」

馬鹿にするなと怒鳴ると、タマがふふんと鼻を鳴らす。

「魑魅魍魎が跋扈する世界はお嫌だと、ご自身で仰ったではありませんか。未知の世界である事は、重々承知しておりますが……婿殿がこれほど意気地無しとは、この先の木崎が心配です」

あからさまに嘆くように言うタマに、皓の額に青筋が浮かぶ。

「てめえ、ふざけるんじゃない！ 意気地無しじゃねえ所、見せてやらあ！」

そう怒鳴ると。

「本当ですか!？」

と、とても嬉しそうな声で静那が問いかける。

その言葉で、自分は今とんでもない事を言ってしまったのではないかと悟る。

しかし。

「それはようございました」

と、ポチは静那の後ろでぱちぱちと拍手をして祝福している。

「なっ……なあっ……!？」

嵌められたと思っても、それはもう遅い。

タマは言質を取ったと目を細め、皓を見る。

「男子たるもの、一言あり等と言う事はありますまい？」

挑発するような言葉と声音に、皓は慥然とした表情を浮かべて頷く。

「くそ、俺はまだ結婚とかする気はねえぞ！」

精一杯の強がりで言うと、ポチが真顔で口を開く。

「それはおそらく、無理です」

ポチの言葉に何々と彼女を睨みつけると、タマがにやりと笑いながら言う。

「お歴々の婿様、嫁様も最初はそう申しておりましたが全て、ご結婚されましたから」

その言葉に青筋を浮かべ、皓は怒鳴る。

「俺は、俺はぜってえはまらねえー！」

肩を揺らしてタマと舌戦を繰り広げる皓を見上げながら、静那はのほほんと微笑んだ。

第三話（後書き）

予定は未定。

と言う事で、不定期連載して行こうと思います。

現時点での登場人物

窪塚 皓（くぼづか こう）

年齢は二十一歳で、フリーター。

ちよつと口は悪いが優しい人。

木崎 静那（きざき しずな）

年齢は十六歳で、職業は退魔師？

おっとりしており、言葉遣いが少々幼い。

タマ

スコティッシュフォールドの。

可愛い顔と丁寧な口調を持つが、実は結構慇懃無礼。

ポチ

犬耳の美女。

クール系の美人だが、口調がぶっきらぼうでそれで損をしている感じ。

主人公は基本的に皓で、ヒロインは静那と言う感じですよ。

第四話

朝からどつと疲れたと、リビングのソファに腰を降ろす皓。

「では旦那様、おまちくださいね」

いそいそと、静那は台所へと行ってしまふ。

突っ込みどころ満載なわけだが、すでに何も言う気力も無い皓は深い溜息をつく。

「タマ、そろそろわたしは主の所に中間報告に行く。ついでにお嬢の報酬も貰ってくるから、門を開いて待っていてくれ」

ポチがおもむろに、膝に乗せていたタマに向かって言い出す。

「ああ、そうですね。主様たちも、今頃やきもきなさっておいででしょうから」

タマはほんの少しだけ名残惜しげにポチの手に顔を擦りつけ、膝から降りる。

そんな二人のやりとりを、胡乱とした表情を浮かべながら皓は眺める。

「では婿殿、失礼いたします」

ぺこりと頭を下げ、犬耳をつけたポチは窓ガラスに触る。

表面がゆらりと揺らぐと、ポチが窓ガラスの中に入ると入った。無論、窓の向こうは外で、しかも皓の部屋は四階である。

窓ガラスを通り抜けた様に見えたわけだが、彼女の姿が窓の向こうには無い。

それに驚き目を丸くしている皓の前で、今度はタマがドロンと言う音を立ててスコティッシュフォールド特有の折れた耳を着け、眼鏡をかけた美青年へと変化する。

「さて、婿殿」

タマよりも低い声音で、タマそのものの口調。

皓の思考も表情も硬直したまま、タマを凝視している。

「婿殿、我々は使い魔だとお嬢様をご説明したでは無いですか」

皓が硬直しているのに気が付き、嘆息しつつよいしょと立ち上る。

「~~~~~普通に理解出来るかあ！」

そう怒鳴る皓に、タマは眼鏡をくいつと上げてなるほどと頷く。

「ですが、契約をなさる以上慣れていただかなければ困ります」

あつさりと高圧的に言われ、皓は思わずむつとする。

そこに、静那が何時の間にか持ち込んだらしいお盆に朝ご飯を乗せて戻って来た。

「たま、そういうのはダメです。それに……旦那様には、きちんとおにぎりの事を知っていただかないと、不公平です」

慇懃無礼と言った言い方をするタマを静那が咎めると、タマは渋々頷く。

意外にすっかりとした態度を取る静那に皓が驚いていると、静那はにっこりと笑いお盆の上に置いてあるおかずやご飯をテーブルに並べる。

朝は適当にパンを焼いて食べる皓だが、目の前に並べられる朝食に目を丸くする。

焼き鮭に卵焼き、白菜のお浸しにネギを刻んだ納豆。

ワカメのお味噌汁を運んできた後は、お櫃に入ったほかほかのご飯を茶碗に盛って差し出される。

実家にいた頃にはしかお目にかかれなかった朝食が並んでいる事に、皓は慌てる。

「おっ……おいつ!？」

冷蔵庫には、これほどの食材は無かったはずだ。

そもそも自炊はできるがあまりしない為、ほとんど空と言つのが現状だったのだから。

皓の驚いた表情に、静那は一拍ほど置いてから笑顔を浮かべる。

「ぼちにお買い物に行ってもらったのです」

静那ののほほんとした言葉に、皓はいつの間にと目を丸くする。

「食費は、お嬢様がご自身で稼いだものより出ておりますのでご安

心ください。また、様々な調理器具が足りませんでしたので勝手ながらそちらも持ち込ませていただきました」

と、タマが言いながら先ほどポチが消えた窓の前に膝をつき、窓ガラスに触れている。

「お……おう……って、いつの間に!？」

皓は思わず台所へ確認に行くと、散らかしっぱなしにしていたゴミや食器が全て綺麗に片づけられている上に、真新しい電子レンジや電子ジャーが置かれていた。

古くて汚れていた冷蔵庫もピカピカに磨かれ、まるで新品の様な輝きを放っている。

換気扇もガスコンロも綺麗に掃除されており、食器棚までピカピカだ。

「いつ掃除したんだよ……」

思わず膝をつきながら突っ込みを入れていると、タマが咳払いをする。

「僭越ながら、ポチと私が掃除と荷物の運び込みをさせていただきました。婿殿は瘴気に当てられ意識を失っておりましてし、お嬢様がその瘴気を浄化する為婿殿に添い寝されておりましたから」

本来ならしない事なのだと言外に言いながら、タマは相変わらず窓の前に陣取っている。

「あの……いけませんでしたか？」

静那が不安そうに皓の傍に近寄り、おどおどと問いかける。

伶俐な美貌とその仕草のアンバランスさに思わずどきりとするが、それを押し隠して溜息をつく。

「まあ……普通はいけねえことなんだが、有り難く飯を食わせてもらおう」

静那にそう言うと、彼女はぱあっと笑う。

色々アンバランスな少女だが、やはり女の子が笑うのは良いと皓は素直に思い苦笑を零す。

テーブルに並べられた、二人分のご飯。

それは、静那も一緒に食べるという意思表示なのだろう。

久方ぶりに一人では無い朝食に、皓は流されていると自覚しつつも何処となく気分が浮上する。

「んじゃま、いただきます」

皓の言葉に続いて、手を合わせていただきますと静那も挨拶をして箸を持つ。

程良く焼けた鮭に美味しいと目を丸くして、皓はパクパクと自身のおかずを片付けて行く。

早食いの皓と比例するように、静那はゆっくりと咀嚼してご飯を食べている。

「いや、料理上手だな木崎」

そう言いながら、お代わりと茶碗を差し出してくる皓。

静那は笑顔で茶碗を受け取り、お櫃からご飯を盛って皓に手渡す。

「ありがとうございます、旦那様」

褒められた事が嬉しいとお礼を言うと、皓はしばらく視線を彷徨わせる。

「ああ……その、旦那様ってやめねえ？俺は、別にお前の旦那とかじゃねえし」

そう言われて、静那はぱちぱちと目を瞬かせる。

「旦那様は、旦那様だと呼ぶものだと教えられています……」

しゅんつと、肩を落とす静那の姿にむうと唸ると、彼女が何かを思い出したような表情になる。

「旦那様と呼ばれるのがおいやでしたら、ご主人さまとお呼びします！」

良い事を思い出した！とでも言う様にウキウキと静那が言い、皓は絶句する。

「ばっ！？誰がそんな呼び方しろと!？」

そう突っ込みを入れると、静那はキョトンとした表情を浮かべて。

「はは様が、旦那様がだめだったらご主人さまと呼びなさいと言っていました」

と素直に言う。

皓はどつと疲れた様な表情を浮かべ、半眼で静那を見る。

「……それ以外、呼びようはねえのかよ」

と突っ込まれるが、静那は小首を傾げる。

「旦那様は、旦那様です。御名を呼ぶのは、旦那様が私と契りを交わして下さる時だけです」

決まり事なのだと言う静那の言葉に、皓は口の中で知っているが意味が思い出せない単語を転がす。

「契り……？」

二拍、三拍程の間を置いてから皓の顔に血が上る。

「な、何言つてやがるっ!？」

契ると言う単語の意味を思い出した皓は赤面しつつ、突っ込みを入れる。

その突っ込みに、静那はキョトンとした表情を浮かべたまま小首を傾げている。

「お、お前なあ……そう言うのは、好きな男とするもんだぞ」

何やら恥ずかしがったのが馬鹿らしくなるほど反応が鈍いので、

皓は咳払いをしてからそう言う。

すると、静那は何度か瞬きをしてから皓を真っ直ぐに見て。

「旦那様としたいです」

と、花開くように笑う。

無垢で真っ直ぐな好意を向けられ、皓は思わず視線を逸らせる。

いや、と言う訳ではない。

気恥しさと照れくささで、まともに静那の顔が見られない。

「た、互いに好きあってないと駄目な行為だからよ……俺が、お前の事を好きにならないと駄目なんだからな」

思わず言ってしまった自分の言葉に、皓は何を言っているんだと内心突っ込む。

学生時代、女遊びが激しかった皓。

今更そんな事を言ったって、説得力がないと自分でも思う。

だがしかし、今まで自分の周りに居なかったタイプの少女で、何よりも今まで見て来たどんな女性よりも無垢で無邪気なのだ。それ故、思わず自分が言う資格の無い台詞を吐いてしまった。がっくりと自己嫌悪に項垂れると、静那がおろおろと近寄ってくる。

「ご飯、おいしくなかったですか？」

心細そうな声で、静那が顔を覗きこんで来た。

その、心底心配していると言った表情に皓は思わず苦笑を浮かべる。

「いや、なんだ……木崎の作った飯は、うめえから安心しろ」

そう頭を撫でてやると、顔を綻ばせる。

嬉しそうな静那の表情に思わず肩の力を抜くと。

「婿殿、姓でお嬢様を呼ぶのは失礼です。お嬢様のお名前を、呼ぶべきだと思いますが？」

タマの鋭い突っ込みに、ぐっと皓は唸る。

「たま。旦那様がおいやなら、しかたがないです」

静那の少しだけ寂しそうな声音に、皓はますます唸る。

はたと気がつけば、なし崩し的に夫婦にされそうな勢いだ。

そもそも、押しかけ女房的に静那が居る時点でそれは明白だ。

取り敢えず咳払いをして、顔を上げる。

「木崎よお……」

そう声をかけると、静那が寂しそうに微笑みながらはいと返事をする。

皓は静那のその表情に小さく呻き、ガシガシと頭を搔く。

出逢ったばかりの少女のそんな表情に負けるなどと思いつつも、寂しそうな表情をすると酷く落ち着かない。

深い溜息をつき、ゆっくりと口を開く。

「し……静那は、家に帰らねえのか？」

取り敢えず、このまま居座るつもりなのかと問いかける。

「はい。ずっと、旦那様と一緒にです」

嬉しそうににこつと笑い、静那は間髪入れず答える。

やはりこのまま住みつくつもりかと眉根を寄せ、口を開く。

「お前なあ、家の仕来たりだか何だか知らねえけど、初対面の男の嫁とかになるのに疑問はねえのか？」

そもそもの疑問に従い、そう問いかける皓。

静那は皓の言葉にゆっくりと瞬きをして、頷く。

「はい。私は、そう言うモノになりましたから」

真剣な声音と表情で、静那はそう答えた。

「……モノになった？」

不可思議な物言いに皓が眉を寄せ眩くと、静那がにこつと笑う。

「ご飯、冷えちゃいます」

静那に指摘され、はっと茶碗を見ると湯気が無くなっている。

「……取り敢えず、飯食っちゃまうか」

誤魔化されたと思いながらも、皓は味噌汁を一口啜った。

第五話

食事を終え、静那がテーブルを片づけているとタマが触ったままの窓ガラスからぬつとポチの顔が現れる。

「タマ、荷物がちよつと多い。手伝つてくれ」

そう言つと、またガラスの向こうへと消える。

皓はそれを見て一瞬驚くが、直ぐに深い溜息をつく。

「なんで俺んちがこんな事に……」

思わず愚痴ると、静那が片付けたテーブルの上にお茶を置く。

「旦那様、お茶を淹れましたのでどうぞ」

静那の柔らかな笑顔と声音にああと頷き、次いで静那が甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる事に何やら落ち着き始めている事に驚愕する。

旦那様と呼ばれるのもなんだか聞き慣れて来ているという事実にも、むしろ慣れたら負けだと己を奮い立たせる。

このままなし崩し的に押しかけ女房を認めるわけにはいかないのだ。

それ以上に、自分のやりたい事を探す為フリーターをしているのだから、それを邪魔されるなどとんでもない。

そう頷き、皓はお茶を一気に飲み干し顔を上げると、タマとポチが大きな収納ケースを三つほど窓の横に積み上げていた。

「お嬢。主様達からの手紙と、昨日と先一昨日に浄化した報酬だ」

そう言つて、ポチは収納ケースの上に二通の封筒を置く。

「あ、ありがとうございます」

何時の間にやら移動し、台所で食器を洗い終えた静那は捲くつた袖を直しながら封筒を開ける。

テーブルの上に報酬だと言う封筒を置き、両親からの手紙が入った封筒を開けていた。

何やら言い出すタイミングを悉く外され、皓は慥然としながらじ

るりとポチとタマを見る。

「婿殿、聞きたい事があるなら聞いてくれ」

ポチはそう言つて、真つ直ぐに皓を見る。

「我々に許されている範囲であれば、教える事も出来よう」

タマの物腰が良いが持つて回つた言い方とは違い、ポチは単刀直入に問いかける。

皓はそのポチの言葉にやっと話が通じるものが来たのかと安堵して、口を開く。

「なんで俺なんだよ。そもそも、なんで拒否をするのが出来ねえんだ？」

低い声で問いかける皓に、ポチはふむと頷く。

「木崎の家は、二君に仕えない。それは、木崎の成り立ちに関わる話。それ故、わたし達には語る事は出来ない。また、成り立ちを知る時は婿殿が本当の意味での契約を交わす事を決意した時のみと決まっている」

しつかりとした口調で、ポチは成り立ちに関わる話は口にできないと言いつ切る。

「ああ……俺に拒否権はねえのか？」

そう問いかける皓に、ポチはしばし考えてから口を開く。

「婿殿以上にお嬢と相性が良く、格が釣り合う者がいれば別だが……

…お嬢ほどの格とつり合える者はまずいまい」

はつきりとしたポチの言葉に、皓の片眉が跳ね上がる。

「何だ？ それ」

低い声音で説明しろと脅す皓に、タマが口を開く。

「お嬢様は、稀有です。人として最高の部類に入るほど、強く穢れていない。それは、お嬢様が選んだ貴方にも言えるのです……婿殿」
タマの真剣な声音にむつと唸り、皓は眉を寄せる。

このままなし崩しは嫌だと態度も表情も語る皓に、ポチは静かに告げる。

「いまだ契約すら交わしていない以上、婿殿には確かに拒否権はあ

る」

ポチの言葉に皓は少しだけ明るい表情を浮かべ顔を上げるが、難しい表情を浮かべるポチとタマに嫌な予感がした。

「……あー、なんかあるのか？」

皓が問いかけると、タマが嫌そうな表情を浮かべる。

「婿殿は契約するとおっしゃってくださったゆえ、言つつもりはなかったのですが……」

言い辛そうに口ごもりつつ、タマは言う。

「鬼達にとって、木崎の長子が伴侶を見つけるのは脅威でしかありません。それは、契約を拒絶しても同じこと。もし我々が離れれば、婿殿は無事では済みますまい」

タマの言葉に、ひくりと唇の端がひきつる皓。

「それは……？」

聞きたくはないと思いつつも問わなければ始まらないと、皓は訊く。

「殺すか、食べられるか……そのどちらかです」

真剣なタマの言葉に、皓は嘘を言っていないとすぐに理解する。

「どっちにしる死ぬのかよ……選択肢ねえじゃねえか」

がつくりと頂垂れ、皓はぼやく。

「我々として、お嬢の婿になる気の無い者を護る謂われは無い。それに、この世界そのものを拒絶するのであれば、身を護る術を与える事も出来ぬ」

ポチはきっぱりと皓に言い、皓はガシガシと頭を掻く。

静那を受け入れるつもりがなければ、彼等は皓を護る気はないときっぱりと斬って捨てた。

責務を背負わなくせに甘えるなど、突き放したのだ。

もつとも、知らなくて良い世界を連れて来たのは向こうだと言う腹立たしさを感じるわけなのだが。

皓は深い溜息をつき、改めて現状をしっかりと認識しようと思つた瞬間、ふわりと柔らかな香りが鼻を擽る。

その香に視線を動かせば静那がいつの間にか皓の足元に座っており、皓の視線に気が付きにこつと笑う。

「私、旦那様以外のかたは選びません。旦那様が一番です」
無垢な笑顔で言われ、皓は思わず咳払いをする。

何の迷いも無く、昨夜初めて会ったばかりの自分に真っ直ぐな好意を寄せてくる静那。

それが酷く照れ臭い様な、気恥しい様な心持になる。

だがすぐに、何故自分はこんなに静那の事で動揺しなくてはいけないかと深く頂垂れる。

静那は皓のそんな姿に小首を傾げ、心配そうにそつと手を伸ばす。

「旦那様、大丈夫ですか？」

静那の心配そうな声音に、皓は誰のせいだと突っ込もうとするが飲み込む。

怒鳴りつけた所で解決するわけでは無いし、静那を泣かせたら後ろが煩い以上に、自分が落ち着かなくなりそうだと思っからだ。

「何でもねえから、気にすんな」

ため息交じりにそう言うが、静那は隣から動かさずそつと皓の手に触れてくる。

「あの……やっぱり、私では不安ですか？」

そう問いかけてくる静那の声は、酷く揺れている。

皓はそれに気が付き、視線を上げて静那を見る。

静那は、酷く不安げに、それ以上に哀しげに皓を見ている。

まるで捨てられるのを恐れる子犬の様なその表情に、軽く目を瞪る。

「お嬢、婿殿は契約をすると約した。だから、そんなに不安そうな表情をするな」

ポチが冷静に言い、じつと静那を見つめる。

静那はなんとか頷くが、その表情は全く変わっていない。

今にも泣き出しそうなその雰囲気、皓が動揺してしまう。

「お嬢様、大丈夫です。お嬢様なら、必ずできます」

タマは慌ててそう言い添え、皓をじろりと見る。

「婿殿、お嬢様を不安がらせないでください」

そうきつい口調で言い、おろおろと手を彷徨わせるタマ。

ポチは小さく溜め息をつき、タマを見る。

「タマ、こればかりは仕方ない。お嬢は生まれた時から『アレ』では無かった」

ポチの淡々とした言葉に、静那の肩が震える。

「だい、大丈夫です……」

小さな声で大丈夫だと答える静那に、皓は眉根を寄せて口を開く。

「何だかわかんねえけど、あんまりこいつを追い詰めんな。大丈夫だ、必ず出来るは人によっちゃ逆効果だ」

皓はそう言い、俯いている静那の頭を撫でる。

「まあ、あれだ。お前じゃなくても、俺は不安だぞ」

皓の言葉に、静那はキョトンとした表情を浮かべる。

「あのなあ。いきなりこんな自分の知らない世界を押し付けられて、不安がらないわけねえだろ」

皓は呆れた表情で、静那を見る。

「でもよ。成り行きとは言え、自分でお前に協力するって言ってんだ。それなのに、お前がそんなに不安がってたら俺だって不安になる。まあ……俺が何をどうすればいいのか全く分からねえから、不安は割り増しなわけだ」

だろ？ と皓は静那を見ると、静那はこくこくと頷く。

「俺としては不安がらないで欲しいわけだが、お前も俺と似たような立場みてえだし……無理だろ？」

タマとポチ、そして静那を見ながら皓は言う。

タマは驚きに目を睨り、ポチは片眉を上げて皓を見ている。

静那は、皓を真剣な表情で見上げ言葉に耳を傾けている。

「だからよ……泣くなり喚くなりしてから、腹を括れや。逃げられねえなら、それしかねえだろ？」

皓の真剣な言葉と表情に、静那はゆっくりと瞬きをする。

ぼろぼろと眈から涙が零れ落ちるが、静那の表情は先ほどよりも明るい。

「はい……はい、旦那さま！」

泣きながら、静那は笑顔で頷く。

皓はそんな静那の頭を撫でながら、胸がふわりと暖かくなるのを感じた。

第五話（後書き）

しかしまあ、引き受けなかったら貴方は死にますとか、どんだけ酷い話なのかと小一時間ですね。

自分の命を質にされたら、普通に言う事を聞くしかないと思います。

ちなみに「木崎」とは「鬼の血花を咲かせる」と言う意味です。

「鬼咲」と言うのをかけて見た訳ですが、無理やり感漂うのは仕様です。で苦情は聞きません（何）

前の話からある「アレ」とか、「モノ」とかは、そのうち説明されます（適当）

世界観は私の妄想の産物なので、突っ込まれても困ります（笑）

第六話

静那が恥ずかしそうにしながら、涙を拭っているとポチが口を開く。

「では、婿殿。性急で申し訳ないが、お嬢と契約してくれ
場が収まった瞬間の言葉に、皓が眉を寄せてポチを見る。

「……お前、もうちょっと空気読めよ」
思わず皓が突っ込むが、ポチは気にしない。

「出来るだけ早く契約し、夜に備えなくてはならない」
そう淡々と言っていると、静那が瞼を少し腫らしながらぱちぱちと瞬きをして、頬を染める。

「契約は、もう済ませています」
恥ずかしそうに頬を押さえた静那の言葉に、皓とタマとポチはキョトンとした表情を浮かべる。

「い……いつそんなもんしたんだよっ！」
焦って皓が突っ込みを入れると、静那はますます赤くなりながら言う。

「その……朝に……一杯してくれました」
恥じらいとはにかみが交じった声音に、皓は必死でいつそんな事をしたのかを考える。

しかし、まったく言っただけで良いほど心当たりがない。
「……お嬢様、本当に初契約として体液の交換……口吻をなさった
のですか？」

タマがそう問いかけると、皓はした覚えがないとぶんぶん頭を振り、静那は小さく頷く。

「朝は、タマがいたから知ってる筈だろ!？」
皓がタマに訴えると、確かにと頷いている。

その二人のやりとりに、静那はしゅんと肩を落とす。
それを見たポチは、静那の肩をがしつと掴む。

「お嬢、それはどんな状況だ？」

果てしなく男らしく問いかけるポチに、静那は少し鼻を鳴らして答える。

「お布団で……」

その言葉に、皓ははっと思いだす。

やけにリアルだった、元彼女を抱く夢。

「まっ、待て！ 俺は夢見てたってか、寝ぼけてただけだ！ それをカウントするのは間違ってるぞ！」

焦って皓は言い、静那は涙目で小首を傾げる。

「お嬢、婿殿の言う通りだ」

ポチがきつぱりと言い切るのに被る様に、タマが身を乗り出して同意する。

「そうです、お嬢様。大体、そんな犬に咬まれた様な事故を初契約として受け取るのは間違っています！」

肩で息をするくらい力説するタマ。

「でっ……でも……」

戸惑う静那に、ポチとタマが力説する。

「互いの同意がない以上、それ以前の口吻は契約にはならない」

「そうです。そして、そんな不埒な事をしようとしたのであれば、遠慮なく殴り倒して良いのですよ！」

ポチが至極冷静に言い聞かせている所に、タマが感情的に対処を言い聞かせる。

「待て、俺の意志はどうなる！？ 寝ぼけた行動で殴り倒されるのは不本意だぞ！」

皓はタマに突っ込みを入れ、おろおろとしている静那を見る。

「お前も、他の女の夢見てる奴にキスされた事を喜ぶんじゃない」

皓の呆れた声音に、静那の表情が凍る。

同時に、皓の背中には室内よりも遥かに冷たく、鋭い視線が突き刺さる。

皓は失敗したと悟るが、なし崩し的に押しかけ女房となった静那

に対してあまり優しくするのもどうかと言つ言葉が一瞬脳裏をよぎる。

だが、静那の眦に盛り上がる透明な雫に、胸を鷲掴みにされた様な感覚が貫く。

そのまますつと白皙の頬を滑り落ちるのを見て、皓は無意識に手を伸ばす。

指先に感じる温い体液の感触に、皓は正気に戻ると同時に手のひらで頬を包む。

静那は何処か虚ろな眼差しで、皓を見上げている。

先ほどよりも感情の無い泣き方に、皓は酷く胸が痛い。

元々、女に泣かれるのは好きではない。

だがしかし、この様な何かを諦めたような泣き方をされて放つて置くほど皓は静那を嫌いではない。

寧ろ、このような泣かせ方をするのは不本意で仕方がなかった。

逢つて間もない少女相手に何やってているんだと言つ自分への突っ込みと、静那に対する腹立たしさや訳の分からない感情を飲み込み皓は静那の唇に己の唇を重ねる。

しばしの間の後、虚ろだった瞳が光を宿し驚いた様に皓を見る。

それを見た皓は何やら照れくさい気持ちになりつつも離れようとした時、静那は恥じらいながらも瞳を閉じる。

緊張をしているが、それでも皓に何をされても良いとでも言うかのよう。

皓はそれを感じた瞬間に衝動的に静那を抱きよせ、緩んだ彼女の唇から舌を挿し入れる。

びくつと一瞬躰を震わせるのは、夢で見た女そのままの反応だ。

初々しいその仕草に、皓は為されるがままの静那の舌を絡め取り吸い上げる。

抱き締めた躰の柔らかさも、鼻孔を擦る柔らかな香りも全てが皓の思考を酔わせる。

仕事を始めてから殆ど特定の女も作らず、その様な欲求を抱いた

時には後腐れの無い女性と一晚を共にしていた。

女は柔らかいと知っていた。

女は柔らかな匂いを纏っていると、理解していた。

だが、これほどまでに細く、華奢だとは思わなかった。

護つてやらなければと当然の様に思うと同時に、全てを征服したいと言う衝動が沸き起こる。

薄く眼を開ければ、静那は眦を赤く染め、どこか恍惚とした表情を浮かべている。

綻る様な手は、儂い力で皓の服を握っている。

思わずその躰に手を這わそうとした瞬間。

「婿殿、情熱的だな」

と、酷く冷静な声が割り込む。

「ええ。何だかんだと言っていますが、婿殿はお嬢様を好いておられる様で安心です」

うんうんと嬉しげに、その言葉に同意する声。

静那の唇を開放し、声の方向を見ると。

「いや、婿殿お気づかないなく」

「ささ、続きを」

と、上機嫌の美青年とどこか恥ずかしげに頬を染めた美女が言う。タマとポチがいた事をすっかり忘れ去っていた皓は、何かを言ううと口を開くが言葉が出ない。

恥ずかしいのと同時に、ハマリかけていた自分に対する腹立ちと黙つて見物していた二人に対する憤りが緋い交ぜになって言葉にならない。

その皓にニヤリと笑うタマだが、咳払いをしたポチに気が付き表情を改める。

改まった雰囲気になったタマとポチに、皓は怒鳴りつけたい衝動を必死に堪えながら静那を見る。

安堵した様な、はにかみと嬉しげな表情を浮かべて静那は皓に全身を預けていた。

その表情を見た皓は腕を離すのをほんの少し躊躇い、無然とした表情で静那の肩を抱いたままソファーに座る。

ここで手を離すと、静那が酷く傷つく気がしたのは内緒だ。

「んで、なんだよ」

不機嫌な声で問いかけると、タマが笑いそうになるのを必死で堪えながら口を開く。

「初契約は済みましたが、あくまで仮に近い契約です。鬼達と戦った後には、必ず体液の交換が必要です」

タマの言葉に、皓が何とも言えない表情を浮かべる。

「これを必ずしないと、婿殿にもお嬢様にも多大な負担がかかりますのでご理解ください」

タマの言葉にへいへいと頷き、皓は小さく溜め息を吐く。

その溜息に、静那が微かに肩を揺らす。

ちらりと静那の表情を見ると、沈んだ様子を見せていて皓は視線を泳がせる。

おっとりとして、何事にも素直に反応する静那。

だからか、静那の何かに触った時の反応や、表情の変化はあんまりにも素直すぎるので気になる。

皓は静那の頭をがしつと掴み、乱暴にわしゃわしゃと撫でまわす。

「っ……………??」

静那は突然の事にキョトンとして、皓を見ている。

「んなしけた面すんな」

そう言ってから、そう言えばとタマとポチを見る。

二人は皓の行動に嬉しそうに笑っていたが、そうだと手を打つ。

「婿殿、仕事は大丈夫なのか？」

ポチの無遠慮な問いかけに、皓の額に青筋が浮く。

今まさに、バイトを探しに行く予定だと話をしようとしていたからだ。

「俺は、これからまさにバイトを探しに行くところだよ！ この不況のせいで、全部クビになっちまったからな」

思わず怒鳴り付け、次いで慥然と付け加える。

「それはようございました」

あっさりとタマは言い、更に青筋を増やす皓の前にポチが書類を取り出す。

「こちらの契約書に署名、捺印を。銀行振替が良ければ、通帳の口座番号を書いてくれ」

唐突に、就職時の事務手続きの様な話になっている事に、皓は激しく戸惑った表情を浮かべる。

「……あ？」

思わず間の抜けた声を上げると、更にごそごとポチが書類を取り出す。

「こちらが社会保険とその他、福利厚生に関する書類だ。これらにも署名と捺印をしてくれ」

猫耳をつけた眼鏡の美青年と、犬耳をつけた伶俐な美女が淡々と新入社員に指示する様に書類を提示してくる。

変にシニールなこの光景に、軽い目眩を感じる皓。

「……待て、ちょっと待て！ これ……これは……俺が、就職するってことか？」

皓の困惑した問いかけに、タマが頷く。

「はい、その通りです。退魔のお仕事も大変なのですよ……怪我をする可能性もありますからね。それに、退魔のお仕事はきちんと報酬も支払われますのでご安心ください」

タマの言葉を聞きながら、契約書を見る皓。

その契約書に記された企業名に、皓は目を丸くする。

全国区のテレビ等で、スポンサーとして宣伝に良く名前を連ねている会社と全く同じ名前だからだ。

「お、おいつ！！ これ……」

皓の驚いた声と表情に、タマは眼鏡をくいつと上げる。

「昔は退魔だけで生活できたのですが、現代ではそれもままならず一般社会に紛れて生きる為に退魔の仕事を全面的にバックアップす

る企業を作ったのです。その一部が、こちらのこの会社です」

眼鏡を光らせながら説明するタマの言葉に、ひくりと皓は唇を引き攣らせる。

「結構古くから……退魔つてやつはあるんだな」

動揺しつつも、素直な感想を呟く皓。

「鬼”は古くからおります。伝承などでも語られているように、常に傍らにいますよ」

タマはそう言って、苦笑を浮かべる。

「鬼”と言うよりも、“妖”と言った方が正しいのかもしれないがな」

ポチはそう補足しつつ、ボールペン等を用意して皓に書類を書くように促す。

「妖……ねえ」

胡散臭いと顔に書きつつ皓がボールペンを持つと、静那はおつとりと口を開く。

「妖とは善きもの、悪きもの、そして傍観するものの総称です、旦那様」

静那の言葉に生返事を返しつつ、書類に記入していると。

「たまとぼちも、そういう意味では妖なのです」

と言う言葉に、皓の手が滑り一瞬字が歪む。

「……どういう意味だ？」

色々複雑過ぎて、何となく頭痛がして来ているのだが、それでもこればかりは問わねばならない。

皓のどこか低い言葉に、タマが答える。

「元は同じなのです。私達も、選んだ道が悪ければ悪きもの……鬼と呼ばれる存在になったでしょう。まあ、私もポチも人を好んでいたのが今の様に、善きものと呼ばれ使い魔をやっているわけなのです」

ほんの少し苦い笑みを浮かべつつ、タマは皓が書き仕損じた書類をもう一枚取り出し差し出す。

それを受け取りつつ、皓は深い溜息を吐く。

「この歳で、また勉強かよ……」

憂鬱そうに呟く皓に、静那はにこっと笑う。

「私も勉強するので、一緒です」

静那の嬉しそうな声に、皓は一瞬目を瞠り。

「そうか」

と苦笑しながら、彼女の頭をくしゃりと掻き混ぜた。

第六話（後書き）

相手が寝ぼけてキスしてきたのをカウントしちゃいけないと思う。と、書いた本人が思うのであります。

急に、現実的な話になるのであった。

と言うか、色々な退魔物の小説や漫画を見て思うのは、怪我をした時大変だと思ったのでこうしました。

現代の退魔師はきつとかなり大変なんですよ。

と言う妄想をしたんです。

第七話

皓が書き上げた書類を大きい封筒に入れ、ポチは小さな箱にしま
い込む。

そのあとトントン、と二度ほど蓋を叩いてから箱を横に置き、皓
を見る。

「取り敢えず、婿殿。これからもこちらの家に住むのであれば、結
界を張らせていただきたい」

ポチの言葉に、タマも頷く。

「また、我らの主……お嬢様のご両親の家との“通路”を開けてお
いても良いでしょうか？ 毎日一度、定期的に連絡を入れる約束を
しておりますので」

ポチとタマの言葉に、皓は胡乱とした表情で頷く。

「ああ、好きにしてくれ」

溜息をつきつつ皓が言うと、ポチが頷き口を開く。

「婿殿が木崎の事を知り、退魔の仕事に慣れた頃に主達から我らの
契約を移される。それまで往復するが、辛抱してくれ」

ポチの言葉に、皓の表情は胡乱とする。

それは、契約が何なのかと言う突っ込みやらその他にも色々と面
倒くさい突っ込みをしなくてはならないのかとか、そんな感情が現
れている。

「……追々知れば良い事ですよ、婿殿」

タマが取り敢えずフォローして、さてと部屋を見回す。

「さて、お嬢様。一応未婚の男女は同衾してはならない規則ですが
……どうしますか？」

タマの問いかけに、皓はぎよっとする。

「ちよっと待て、なんでわざわざ聞いているんだよー！
突っ込みを入れるが。」

「旦那様と一緒にがよいです」

と、笑顔で静那がタマに答える。

「なんでって、お嬢の荷物を運ぶ場所が困るからな。それに……この部屋は少々手狭だ。婿殿とお嬢と一緒に寝た方がいい」

ポチの真面目な表情に、しかしタマは渋い表情だ。

「しかし、お嬢様と婿殿が一緒に、万が一にも間違いがあつたら不安です。意に沿わぬ無体を強いられたとなると、契約に支障をきたしかねません」

それ以上に、静那が泣かされるのは嫌だと顔にありありと書いたタマは言う。

「なんじゃそりゃ。つーか、よっぽどの事がない限り部屋は別々で良いだろ」

皓は人の家に押しかけ女房出来て置いて、強引に押し倒されたら困るとか言い出すタマを半眼で見る。

「……旦那様は、おいやですか？」

しかし、皓のその言葉に静那は小首を傾げ、そう問いかける。声は心細そうに細く、その瞳はまるで捨てられた子犬の様だ。

皓はうつと詰まり、しかしこればかりは曲げないと静那を見る。正直、先ほど口吻をした時の様な衝動を抱いてしまった以上、無防備な姿等を見せられたくはない。

そんな姿を二人っきりの時にでも見せられたら、手を出してしまいたいからだ。

だが、静那はますます哀しそうな表情になり俯く。

「……はい、判りました……」

物凄く沈んだ声で、静那は頷く。

拒絶された事に酷く落ち込む静那の態度に、皓はきゅっと眉根を寄せて眉間を揉む。

ちなみに、タマとポチは氷の如き瞳で皓を見て早く慰めるとせつついている。

「あのなあ……付き合ってもいねえ奴と同じ布団で寝るのはな、異常なんだよ。てか、もう少し自分を大事にしろ。変な奴だつたら、

お前はつくり食われているぞ」

皓の「付きあっていない」と言う言葉に、静那はますます俯く。皓自身、静那に対する好意はあるだろうとそれなりに分析している。

だがしかし、見るからに十六歳の女の子である静那に手を出すなど、恋愛ごと以外で手を出せば条例違反で犯罪者だ。

それでなくともどこか幼い雰囲気を持っている少女で、皓はこの胸のもやもやは恋愛から来ているのかそれとも庇護欲から来ているのか判断できない。

そうである以上、一つのベッドで一緒に寝るなど危険過ぎて出来やしない。

しかし、こうして目の前で傍にいられない事に落ち込む静那を見ればそわそわと尻の座りが悪く、皓は困ってしまう。

「とりあえず、あれだ……」

がりがりと頭を掻きつつ、皓は言う。

「別に嫌ってるわけじゃなくてな。もうちっとお互いの事を良く知って、それから同じ部屋になるならなを決めるっつー事にしてえ」

これが精一杯の譲歩だと、静那に言い聞かせる。

静那は皓の言葉に顔を上げ、潤んだ目をぱちぱちと瞬かせる。

「俺も、静那も互いの事を知らねえだろ？」

皓はそう言っつて、眦に残っている涙を指で拭ってやる。

その指の感触に静那は嬉しげに目を細め、そして小さく頷く。

「はい。でも……さみしい時には、お傍にいつて良いですか？」

そう、微かに震えた声で静那が問いかける。

まるで子供の様な問いかけに、皓は苦笑を浮かべる。

「一緒に寝ねえつて言っつてるだけで、傍に寄るなどは言っつてねえよ
そう言っつて、静那の頭をくしゃりと掻き混ぜると、静那は嬉しそ
うに頷く。」

「はい、旦那様」

すっかり聞き慣れてしまったうえ、何故か慣れてきてしまった呼

び名にうんざりしつつも、皓は頷く。

タマとポチはそんな二人にうんうんと頷き、良かったと安堵した表情を浮かべて立ち上がる。

「では、お嬢様。我々はあちらの部屋にお嬢様の荷物を運び、準備しておきますゆえ失礼します」

タマは一礼して、一足先にと静那の荷物が入っているらしいボックスを手に隣の部屋に消える。

「お嬢。後でこの近辺の見回りに出てから、今日の分の授業だ」

忘れるな、とポチは言い聞かせてから残りのボックスを持ち上げタマの後を追う。

その二人に深々と静那は頭を下げながら、テーブルの上に置いてある封筒を手取る。

「あっ」

静那の驚いた声と同時に、バサバサと音を立てて封筒から札束が飛び出してくる。

如何少なく見積もっても、そこそこの会社に勤めているサラリーマンくらいのお金が入っている。

それに驚きつつも、そう言えばと思い出す。

「静那も、あの会社の社員か？」

退魔師達のカモフラージュ企業に入っているのならば、このくらいの給料は頷ける。

「私は、まだ高校をそつぎょうしたという証明をいただいてないので、あるばいんです」

落ちたお札を拾っていたが、皓に質問をされたので正座をして真っ直ぐに皓を見詰めて静那は答える。

「……いや、悪かった」

その静那に何やら訊いてはいけない事を訊いた様な気になって、思わず謝罪しつつお金を拾う。

「いえ。つうしんきょういくを受けていますので、大丈夫です」

静那は笑顔で胸を張り、皓はそんな静那に苦笑してお金を手渡す。

「そうか、えらいな」

そう言つと静那はますます嬉しそうな笑顔を見せ、皓は何やらくすぐったい様な気持になる。

「あつ、旦那様。外に見まわりに行く時は、ご一緒に行きませんか？」

笑顔で問いかけると、皓はむつと眉を顰める。

「さつきポチが言つてた見回りつてやつか……なんで、そんな事をするんだ？」

皓の素朴な疑問に、静那は数度瞬きをしてから答える。

「このあたりは昨夜初めて来たので、どの様なまちなのかを見てまわるのです」

静那の答えに、皓はまた素朴な疑問を抱く。

「……家はどの辺りなんだ？」

静那は再びぱちぱちと瞬きをして、住所を答える。

それを聞いた皓は、啞然とした表情を浮かべて静那をマジマジと見る。

「遠いなあ……おい」

思わず突つ込むと、静那は小首を傾げる。

「こちらに来る時はきょうりよくしてください。たかたがいましたから……門を開いてくださつたのです」

ごく当然の事と言いたげに、静那は皓に告げる。

皓はその事に眉間を指先で揉みながら、口を開く。

「その門つてやつ、買い物に行く時とかに使つてるのか？」

皓の問いに、静那は少しの間の後フルフルと頭を振る。

「いいえ。門を使つてのいどうは鬼を退治するときのみです」

「そんじゃ、昨夜もそうだったのか？」

皓の問いかけに、静那はこくと頷く。

「はい。その時に、とても綺麗な青い光が見えたのでこちらへ行きましたら……旦那様に、お会いできたのです」

嬉しそうに、幸せそうに静那は微笑む。

「そ、そうか」

そう頷いて、皓は照れながら鼻の頭を指先で搔く。

静那ははいと頷き、笑顔のままお茶を淹れて湯呑を差し出す。

皓はそれを受け取り、冷ましながらお茶を啜る。

ゆっくりと味わってみれば、静那のお茶はかなり美味しい。

現状に対する溜息を吐きたい気持ちもあつたのだが、このお茶に免じてそれを飲み込んだ皓だった。

第八話

静那にお願いされた皓は、タマとポチを連れて静那と一緒に近所を散歩する様に歩いていた。

起きた時間は早朝だったのだが、色々な話をしていたせいも既に昼近くになっていた。

仕事を探しに行く時間を返上しての話し合いだったわけだが、思わぬ仕事に就く事になり皓としてはこれはこれで良いと思う事にした。

フリーターになっていた理由は、自分がしてみたい仕事を探すという名目だった。

本音は、両親や周囲の押し付けに辟易したからである。

その為、不況の波で仕事切りなどにあっても家に連絡をしなかったのだ。

もっとも、現状はあの頃よりある意味最悪である。

強引に押し付けられたようなもので、自分の意志が殆ど無い。

しかし、それでも良いかと思えたのは全く知らない世界だったからだ。

命がけの恐ろしい世界だろうとは、タマやポチの言葉からうかがい知れる。

そんな世界に、伶俐な美貌を持ちながらもややどんくさい静那が居るのだ。

恐ろしい等と言っていられないと思うのと同時に、自分の探している“何”かを見つけれられるのではないかと感じていた。

そんな自分の心境の変化に思わず苦笑すると、静那が怪訝そうな表情を浮かべて見上げてくる仕草が目に入った。

「如何した？」

そう問いかけると、静那はゆっくりと瞬きをしてから口を開く。

「旦那様が、困っているように見えたのです」

ほんの少しだけ心配そうなその表情に、皓は頭を振る。

「別に、困ってるわけじゃねえ」

また苦笑を浮かべながら言い、自分の隣を歩く静那を見る。

静々と歩く静那の姿勢は、とても良い。

良い所のお嬢様と言った雰囲気醸し出され、その美貌と相まって物凄く周囲の耳目を引いている。

無論、静那だけでは無くその後ろを歩く眼鏡の美青年とその連れの美女でもある。

ちなみに、その二人はきよろきよろと周囲を見ながら目を細めて何かを確認し合っている。

「昨夜はこのあたりで鬼と会ったようですが、なるほど……」

と、昨夜静那と皓が出逢った辺りを見てうむと頷くタマ。

そこでふと、皓は昨夜静那から渡された鈴を思い出した。

「そっぴや……静那が俺に渡したあの鈴は、何なんだ？」

皓の問いかけに、静那は小首を傾げて数度瞬きをしてから口を開く。

「あれは、お守りです。とと様とはは様が“鬼”に傷つけられないようにと、くださったのです」

おっとり微笑み、静那は皓の疑問に答える。

「……んな大事なもん、俺に渡すんじゃねえよ」

皓が思わず突っ込みを入れると、静那は微笑んだまま頭を振る。

「旦那様が、お持ちください。私より、旦那様のほうがお怪我をしておりますから」

だから少しでも、護りになるようなものを持っていて欲しいと静那は皓を見上げる。

静那の言葉に、皓は思い出す。

傍らでおっとりと微笑む静那が、退魔の力を宿した武器に変じると言う事を。

正直信じられないのが本音だが、タマやポチが目の前で動物や人間に変身している。

だがそれでも、人が無機物に変身するなどという事は普通に信じがたい。

それが表情に出ていたのか、静那が眉尻をへにやりと下げる。

静那の表情に皓はうつと詰まり、それから眉を寄せつつ口を開く。

「俺の常識つつうのがあってだな……」

なんと言うべきかと悩みつつ、言葉を考えていると後ろからタマが口を挿む。

「お嬢様。一般の方は中々信じられない事なものですから、そんなに悲しまないください」

タマの慰めの言葉にこくと素直に頷く静那だが、その表情は晴れない。

皓は参ったと後頭部を搔いてから、萎れている静那に声をかける。

「この鈴は、ありがたく受け取っておく。それと、お前にとっては当然のことでも俺にとつては当然ではない事つてのは沢山あるんだ。俺が中々信じられねえのは、実際目にしてねえからだ」

わかるか？ と皓は静那を見る。

静那はきよとんと皓を見上げ、ゆっくりと瞬きをする。

理解しているとは言い難いその表情にどのように説明するかを考えながら、皓はゆっくりと歩く。

「例えば、だ。俺が実は人間国宝だとか言ったら、お前は信じられるか？」

皓の問いかけに。

「旦那様、凄いです！」

静那は驚いた表情で、あっさりと言じ込む。

皓は静那の反応に頭を抱え、思わず呻く。

「お前……ちつたあ人を疑え！」

半ば八つ当たりに近い言葉に静那はきよとんとしてから、フルフルと頭を振る。

「旦那様を疑うなんて、できません」

この答えは間髪いれずに戻ってきて、皓はまた呻く。

「あの……なあ……」

何をどう突っ込もうかを悩みつつ、皓はとりあえずと言葉を続ける。

「とりあえず、俺はお前の知っているモノをしらねえ。目にして知って、それで初めて信じられるんだ。だから、俺が知らないっつーことでお前がいちいち傷ついて凹む事はねえ」

肩を落としてそう言つと、静那は軽く目を丸くしている。

ぱちぱちと瞬きをして、目にすれば信じると言った皓の言葉を考える。

「人間、最初から全部知ってるやつなんざいねえ。知る為に勉強して行くんだろ？」

皓の言葉に静那はゆっくりと頷き、微笑を浮かべる。

「はい、旦那様。申し訳ありませんでした」

この時やつと、静那は皓が一般人で何も知らないという事を本当の意味で理解したのであった。

「理解してくれりゃ、良い」

皓はほつと安堵して、静那の頭をくしゃりと撫でる。

静那は皓のその行動に嬉しそうに笑い、こくりと頷く。

何処か幼い表情で笑う静那に皓はほんの少しの安堵を浮かべ、どこまでも自分の言っている事を疑う事無く信じる静那が心配になる。

「あとな、静那。俺を信じるっつーのはまあ、嬉しいし良い事だとは思う。だがよ……どんなに信頼していても、疑う事は重要だ。俺の姿をした鬼つてのに会ったら、お前どうするんだよ」

思わず、要らぬ事かもしれないと思いつつも忠告を口にしてしまふ皓。

静那はその言葉にしばしと瞬きをしてから、ふわりと微笑む。

「鬼と旦那様のけはいは、全くちがいますから分かります。何より

……旦那様のけはいを鬼がまねできるとは思えません」

静那の言葉に、そう言うものなのかと皓は眉間に眉を寄せる。

「ああ……まあ、そう言う事じゃなくてよ。俺はお前が思ってい

るほど、良い奴じゃねえ。初対面で信頼してくれるのとか、そう言うのは嬉しいけど……もう少し、警戒心くらい持つてくれ」

自分の言葉以外でも、知っている人や信頼している人の言葉は疑う事無く鵜呑みにしているような気がして、皓は思わず注意する。

「……？」

だが、静那には通じていないのか不思議そうな表情を浮かべ、小首を傾げて皓を見上げている。

どこまでも素直に顔に出る静那に、皓は思わず天を仰ぐ。

誰がこんな風に育てたと、突っ込みを入れたい気持ちでいっぱいだ。

「まあまあ、婿殿」

「外でそうやって呼ぶんじゃねえ」

タマの諷める言葉に、鋭く皓は言い放つ。

それで無くとも注目を集めていると言うのに、さらに問題発言をされては困ると皓は無然とした表情だ。

スコティッシュフォールドの耳が無いタマは、何を恥ずかしがっているのやらといった表情を浮かべつつ頷く。

「判りました。では、外ではなんと？」

執事のように丁寧な言葉遣いをするタマに、思わず嫌そうな表情を浮かべて言う。

「皓でも窪塚でも、クボでも好きに呼べ」

皓の言葉に眉を顰め、タマとポチは困惑した表情を浮かべる。

「できれば……婿殿が一番良いのですが」

「却下だ」

何故名前や名字で呼ぶのがいやなのかと、皓は眉根を寄せつつあっさりとして却下。

「では、ご主人さまと呼ばせていただこう」

ポチはあっさりとして、静那に却下を出した言葉を口にする。

「なっ!？」

焦る皓だが、タマはなるほどと頷く。

「さすがポチ、良い事を言います」

うむと頷き、タマはにっこりと笑う。

皓は眼を剥き、怒鳴ろうとするがここは往来である。

流石に呼び方如きで騒ぎ立てるのは、恥ずかしい。

「帰ったら覚えてるよ、てめえら」

低く、どすを利かせた声で皓は一人に言う。

「ご主人さま、何をそんなに怒っておられるの？」

と、タマは確信的な黒い笑顔でそう言う。

びしりと皓の額に青筋が浮かぶが、隣の静那がおろおろしているのに気が付き舌打ちをする。

「静那、買物があるんだろ？ とつとと行こうぜ」

後ろの二人は完全無視だと心に決めて、静那の手をぐいっと引っ張ってすたすたと歩き出す。

静那は突然の事に困惑した表情を浮かべていたが、直ぐに頬を染めて小走りしながら皓の歩調に合わせる。

その二人の姿を後ろから眺めるタマは小さく喉を鳴らして笑い、

ポチは苦笑を浮かべている。

「あまりからかうな、タマ」

ポチの突っ込みに、タマは笑みを浮かべたまま彼女を見る。

「良いじゃありませんか、ポチ。これくらいの意地悪をしても罰は当たりません」

ねえ？ と極上の笑顔でポチに微笑みかけ、遠くなる背中を追いかける為に歩き出す。

「だが……被害にあうのはお嬢だぞ？」

ポチは呆れた声を上げながら頑張って小走りをする静那を指さすが、それでも嬉しそうな表情を浮かべているのに気が付きますます呆れ返る。

「まあそうかも知れませんが、良いじゃないですか。お嬢様のあの表情を引き出せるのですから」

タマはそう言いながら、そっとポチの手を握る。

ポチはタマに手を握られ、ほんの少しだけ恥ずかしそうな表情を浮かべつつ歩く足を速める。

照れて足早になったポチにくすくすと笑いながら、タマは歩調を合わせて歩く。

鬼の気配の残滓などが無いかを探りながらも、こっそり恋人と手を繋いで歩ける幸せを味わうタマであった。

第八話（後書き）

タマとポチは、実はラヴラヴな恋人同士。

そして、ポチは若干照れ屋さんなのであった。

伶俐な美女は照れ屋さんって、結構好きなんですよ。

しかし、一日が中々終わらないですよ……。

第九話（前書き）

皆さま、新年明けましておめでとつございます。

今年もマイペースですが、執筆と更新を頑張りますのでこれから
もどうぞよろしくお願いいたします。

第九話

近くのショッピングセンターとスーパーで買い物を終え、皓は大量の荷物を持ちながら歩く。

左右の手には大きなビニール袋が二つほど握られ、中には大量の食品が入っている。

静那の手にぶら下がっている袋には静那の服などが入っており、後ろを一緒に歩くタマとポチはやはり静那の服などを持っているようだ。

「なんでそんなに服が必要なんだよ」

結構な時間ショッピングに付き合った皓は、思わずそう突っ込みを入れる。

静那は小首を傾げて、言葉をよく噛むような表情を浮かべている。

「静那じゃねえ、この突っ込みはポチだ」

そう、長いショッピングになったのはポチが静那の下着から服までを吟味し買い込んでいたからだ。

「それは、私はお洋服をあまり持っていないからです」

笑顔で静那は言い、ポチとタマはコクコクと頷く。

「は？」

皓は思わず変な声を上げてしまうが、静那は笑顔で皓の隣を歩いている。

「お嬢様は、洋服は現在着ておられる一着しかありません。それ以外は全て和服です」

タマが皓の突っ込みの意図を理解し、そう説明する。

「……着物しか持ってねえのか？」

ほんの少しだけ眉を顰めた皓の問いかけに、静那はこくと頷く。「しゅぎょうの時もおしごとの時も、お家に居る時もお着物で過ごしていました」

静那の返事に、皓は何となく色々な事を納得する。

「和服が普通の家か」

うん、と頷きながらちらりと静那を見る。

静那の姿勢の良い立ち姿や、歩き方。

何処か気品がある様なその姿に、着物で過ごすのが普通の家と聞けば納得できるものがあるからだ。

もつとも、それ以上に静那の性格を知らば知るほど、どこぞの良家の箱入り娘にしか見えないわけなのだが。

怜悯な容姿と相反するおっとりとしか表現できない雰囲気と性格に、微笑ましい気持ちになる。

それと同時に、自分がこの三人に馴染み始めている事に苦笑してしまう。

皓の苦笑に静那は相変わらず小首を傾げている訳なのだが、タマもポチも特に口を挿む事無く家路を歩く。

かなり荷物が多いので、タクシーを利用すればよかったと皓が嘆息すると同時に真正面に高校生くらいの少年が少しだけ安堵した表情で駆け寄ってくるのが見えた。

この近辺に住んでいる学生かと思いつつ歩いていると、少年は真っ直ぐに静那を見ている。

「静那さん！ 昨日は急に居なくなるから、心配したんですよ！」
そう言いながら静那の前に立ち、笑顔で少年は彼女を見下ろす。

静那は数度瞬きをして、それから恥ずかしそうに頬を染めて頭を下げる。

「昨夜はご心配をおかけして、申し訳ありませんでした」

静那に頭を下げられた少年は慌てて手を振り、笑みを浮かべる。

「いえいえ、気にしないでください。無事だったから、本当に良かったです」

少年はそう言って、タマとポチを見てからちらりと皓を見る。

その視線は、皓の事を訝しく思っているのがありありと判るほど不愉快なものだ。

皓はそれに瞬時に気が付き、ぎろりと睨みつける。

少年は睨まれた事に不愉快そうに眉をひそめ、ぐいつと静那の腕を引く。

「それより静那さん、こんな処で何をしておいでですか？ 貴女に是非、当家に来ていただきたいのですが」

まるで、一刻も早く皓から引き離したいと言う素振りを見せる少年に、タマが口を開く。

「控えなさい、火野家の少年よ」

冷たい声音と口調で諫めるが、少年は眉を顰める。

「たかがか使い魔の分際で、ボクに意見するな」

ますます不快そうな表情を浮かべ、少年はタマにそう吐き捨てる。

「あの……」

静那は困った表情を浮かべ、戸惑いながら少年に声をかける。

「静那さん、行きましょう」

頭から静那の話を聞く気の無い少年の態度に、皓は自分の荷物をタマに強引に渡して静那を掴む手を引き剥がす。

「何をする！」

思わぬ力で静那から引き剥がされた少年は目を剥き、皓を睨みつける。

「それはこっちの台詞だ」

少年の態度に皓は顔を顰め、そう言っつて静那を背中に庇う。

「ちったあ人の話を聞け、餓鬼が」

皓は少年にそう吐き捨て、手で先に家に帰れと指示を出す。

ポチは頷き、静那を促そうとするが静那は皓の腕を掴み少年を見る。

「啓太くん。私は、旦那様を見つけたので行けません」

そう言っつて、静那は幸せそうに微笑む。

だが、啓太と呼ばれた少年は目を剥き、皓を見る。

「こ……こいつですか？」

静那に対しては敬語の啓太だが、皓に対しては使う気が無いのか「こいつ」呼ばわりをする。

皓はそんな啓太に、獰猛な笑みを浮かべる。

「喧嘩なら買っぞ、おい」

低く、どすを利かせた声で言う皓。

「大人げないぞ、ご主人さま」

ポチがすかさず突っ込み、皓は眉を顰めてポチを睨む。

「うるせえな。それより、とつとと帰ろっぜ」

往来で騒げば恥ずかしい思いをしそうだと、皓は静那の頭を撫でて三人を促す。

「まっ……待て！」

啓太が慌てて声をかけると、皓は面倒くさいと表情に書きながら顎でついてこいと示す。

皓のその態度に啓太が怒鳴ろうと口を開きかけるが、ポチが振り向き口を開く。

「往来で怒鳴り散らすなど、見つとも無い真似をしてくれるなよ？」

元素使い火野家の少年」

釘を刺すかのようなポチの言葉にぐっと詰まり、啓太は渋々足を踏み出す。

裏の世界の話往来でする様な事ではないのは確かで、啓太は不本意だが納得をしてポチの後をついて行くのであった。

第九話（後書き）

第十話

皓は無然とした表情のまま、部屋の鍵を開ける。

後ろから付いてきている少年の視線は鋭かったのだが、今は冷たさを纏い皓の背中を突き刺して来る。

腹が立つがそれを無視して、皓はさっさと家の中に入る。

静那はその後について家上がり自分の分だけではなく、皓の靴もきつちりと揃えてからただいまとリビングへと行く。

タマとポチは同じように靴を脱ぎ、すぐ横にある靴箱に靴をしまつてからそれぞれ術を解いて耳を出す。

少年はすでに強固な結界に護られたこの部屋に嫌そうに顔を顰め、靴を脱いで家にかかる。

「人の家に来て嫌そうなのツラすんな」

不愉快と書いた表情のままリビングに来た少年に、皓は睨みつける。

少年はますます無然とした表情を浮かべ、立ったまま皓を睨みつけている。

皓はそんな少年の態度に青筋を浮かべながら、笑みを浮かべる。

「喧嘩なら買っぞ、おい」

声音も表情も獰猛と言っても良い程、恐ろしい笑顔である。

酷い威圧感に少年は一瞬、腰が引けるが直ぐにシャンと背筋を直す。

「嫌なものは嫌だから、仕方がない事だろう？」

そう言っつて、威嚇するように皓を見る。

「んじゃ、何で来た」

そう詰問する皓に、きつぱりと告げる少年。

「静那さんが騙されていると思ったから、連れ戻す為に来たんです」
少年の言葉に、静那はぱちぱちと瞬きをする。

タマとポチは少年の言葉に不愉快気に眉をひそめ、ぎろりと睨み

つける。

「あのなあ……俺が何処でどうやってこいつを騙すんだよ」

皓は少年の言葉に憮然と言い返し、静那を見る。

静那は静那でゆっくりと言葉を噛み砕いているのか、数度頷いている。

「昨夜、静那さんを騙したから彼女はここにいるんだろう？ 大体、静那さんは十六歳の少女だ。あんた二十歳過ぎてるんだから、条例に反するぞ」

あつさりと人を犯罪者扱いする少年の言葉に、皓の額に更に青筋が浮く。

「てめえ……俺が無理やりなんかしたとでも言いたいのか、ああ？」

皓の言葉に、少年も怒りに顔を歪めながら頷く。

「契約をしたと言う事は、そう言う事だろう！？」

我慢できんと怒鳴る少年に、静那がおつとりと声をかける。

「啓太くん、私は旦那様に騙されてなどいません」

静那の言葉に少年、啓太はばつと振り返る。

「いいえ、騙されています！ 無理やり契約をさせられたのでしょー！？」

啓太の断言する言葉に、皓は立ち上がる。

「どっちが無理やりだ、ゴラあ！」

そもそも、押し掛けられたのは皓の方で、騙されたと言えるのも皓の方なのである。

青筋を立て、怒鳴る皓を啓太は睨む。

「あんたが静那さんに無理を強いたんだろう！？」

「ふざけんな！ 朝から人の布団に潜り込んでたのはこいつだぞ！」

「も、もうそんなところまで……！ 貴様あ……！」

「俺はなんもしてねえぞ！」

どこまで行っても平行線な言い争いに、静那はいそいそと立ちあげりお茶を入れて戻ってくると、不毛な怒鳴り合いをしている皓と啓太に声をかける。

「旦那さま、啓太くん。お茶淹れましたので、どうですか？」

おつとりと、話題の中心人物に声をかけられ皓は思わず脱力する。「静那さん。正直に、おっしゃってください！ この碌でもない男に騙されておられるのでしょうか！？」

啓太の言葉に、静那は小首を傾げてからふわり花が綻ぶように微笑む。

「旦那様は、だます様なお方じゃないです。それに、とても優しい方なのです」

頬を染め、思いつきり惚気のような言葉を発する静那。

この言葉に啓太だけではなく、皓まで目眩を覚えてしまう。

「あ……のなあ……俺と静那は、付き合ってるわけじゃねえだろうが」

唸るように思わず皓が呟く。

近いうちにほだされてしまいそんな自分がいるのを感じておりその声音は苦い。

一方、啓太は蒼褪めながら頭を押さえ、口を開く。

「また、貴方達は一般人を選ぶのですか！？ 何故、元素使いや封印や使役の一族、先見や探査を生業とする一族の中から選ばないのですか！？」

啓太の怒鳴り声に、静那はぱちぱちと瞬きをして啓太を見る。

皓もまた、酷く憤った啓太の様子に眉を顰めて向き直る。

「我々の方が、一般人よりも力の扱いに長けている！ だと言うのに、何故それほどまで外に担い手を求めるのですか！」

責め詰る啓太の言葉に、静那の眉尻は下がり泣きそうな表情を浮かべる。

「啓太くん……」

「貴方達は何故、ボク達を蔑にするのですか！」

矜持を傷つけられたかのように責める啓太の襟首を、皓はぐいつと引つ張る。

「ぐえっ」

思わずカエルが潰された様な声を上げる啓太だが、皓はかまわず泣きだしそうな静那を引つ張りポチに押しつける。

「あっち行つてろ。この馬鹿な餓鬼の話なんざ、聞く必要はねえ」
かなり腹を立てているのか、皓の声は低い。

「貴様には関係ないだろう！」
喉を押さえ、涙目の啓太が怒鳴ると同時に皓は啓太の顔を拳で殴り付ける。

突然の暴力に静那は目を丸くして体を硬直させ、タマとポチは口を開こうとするが背中を向けている皓の威圧感に圧倒されて何も言えない。

「ざけてんじゃねえぞ、糞餓鬼」

低く呟かれた声音は、先ほどよりも更に凶悪度を増している。

「てめえの都合で、女を泣かせてんじゃねえよ。てめえじゃ駄目だから他に行くしかなかったって、考えられねえのか？」

皓の言葉に啓太はギツと顔を上げ、よろめきながら立ち上がる。

「だからと言って……ボク達を蔑にして良い理由などない！」

啓太の言葉に、皓は鼻で笑う。

「んじゃ、てめえが静那にしている事はなんだ？ てめえの都合を押しつけて、静那を蔑にしているじゃねえか」

皓の言葉に、啓太はキリキリと眉を吊り上げる。

「……彼女はそう言う存在だ」

低く告げる啓太の言葉に、静那の体が震える。

「それは、てめえがそういう目でしか見てねえからだろうが。静那は静那。後ろ盾があるにしろなんにしろ、一人の人間で一人の女だ。そいつを泣かせてまで通す道理なんざねえ」

静那と言う人間を無視するような発言、行動、その全てが皓にとつては我慢ならないものであった。

それはかつて、自分がその様に扱われた事が起因している。

親の敷いたレール通り歩くなど嫌だと、自分が決めたものを歩くのだと確固たる信念の下に今こうして生きているのだ。

所詮他人事と、静那と啓太のやり取りをただ見ているのは簡単だ。だが、少なくとも静那は皓に好意を示し、皓自身静那を護ってやらなくてはと思うほどの好意は持っている。

だからこそ、目の前にいる啓太が許せないのだ。

「他人を尊重出来ねえやつは、俺の家の敷居をまたがせるつもりはねえ。出ていけ」

頬を真っ赤に腫らせた啓太に顎をしゃくり、外を示す皓に啓太は拳を震わせる。

「たかが一般人が、このボクに大層な口を聞く……貴様が担い手であるなど関係ない。殺してやる」

低い声音で啓太が言うと同時に、啓太の腕が炎に巻かれる。

その姿に皓はぎょっとした表情を浮かべ、啓太は皓の驚いた顔に笑みを浮かべる。

「死ねえ！」

炎を纏った拳を真っ直ぐに皓に打ちだす啓太。

皓は驚いてはいたが、直ぐにその拳を片手で受け止め握る。

「馬鹿が！」

啓太は嘲笑し、拳に纏わせていた炎が皓の腕に燃え移る。

だが、皓は涼しい表情で啓太を見下ろす。

「どんな手品だがしらねえが、下らねえ事してんなよ」

呆れた声音で皓は言い、啓太の腕をそのままねじり上げる。

「ぐああっ！」

腕に走る激痛に呻くと、ポチとタマが慌てて駆け寄る。

「婿殿！ 熱くないのですか！？」

「婿殿、取りあえず火野家の少年を此方に！」

ポチとタマが顔色を変えて驚いている事にやや毒気を抜かれ、訝しげな表情を浮かべながら皓は痛みで悲鳴を上げる啓太をタマに渡す。

すると、その利き腕を静那が泣きそうな表情で掴み確認する様に手のひらで触れる。

「如何した？」

何故静那やタマ、ポチがそれほど心配そうにしているのかが判らない皓は問いかけながら、静那に腕を引かれてソファーに座る。

「あつ……あつく、ないのですか？」

瞳に一杯涙を溜めて、静那が皓に問いかける。

「ん？ ああ……全然熱くなかったぞ。それよりあれ、どんな手品だ？」

皓はあつけらかなと静那に問いかけると、静那がぼろぼろと涙を零して泣き出す。

「おつ、おい……如何した？」

泣きだした静那に皓は動揺しながらも平静を装い、声をかけながら頭を撫でる。

「旦那様がごぶじで良かったです……ほんとうに、ほんとうに……」

ひつく、ひつくと嗚咽を零しながら静那は言い、皓は困惑した表情でタマを見る。

タマは啓太を取り押さえながら、苦笑を浮かべる。

「まったく、婿殿には呆れますよ」

タマの言葉に、驚愕していた啓太が口を開く。

「貴様……なんで、無事なんだ？」

震える声に、ポチが嘆息する。

「お嬢に釣り合うだけの“格”の持ち主。お前程度では、傷一つつけられないと言っ事だ」

それでも、タマもポチも焦ったのは内緒である。

「ばっ……馬鹿な……！」

啓太の声に、皓は眉を寄せる。

「状況が良くわからんが……取り敢えずお前、その若さで頭固すぎるぞ。もっと柔軟な思考をしねえと、世の中渡っていくのに苦労するぞ？」

年長者として、思わずそんな事を口にしてしまう皓。

その言葉に、思わずタマが噴き出す。

「む、婿殿……処世術を教えてくださいですか」

くつくつと喉を震わせ、笑うタマ。

ポチはポチでやや呆れた表情を浮かべてはいるが、ほんの少しだけ笑っている。

ピリピリとした緊張感が緩み、室内は静那の嗚咽を零す声だけが響く。

「あ……んなに泣くな、な？」

皓は困惑した表情を浮かべながら静那に声をかけ、静那はコクコクと頷きながらも中々涙が止まらない。

「お前、今日だけでかなり泣いてるだろ。水分無くなっちまうぞ？」
泣きすぎて脱水症状を起こすのも可哀そうだと皓は言い、取り敢えず温くなっているお茶を静那に手渡す。

静那はまだ涙を零しながら、お茶を一口、二口と飲む。

「取り敢えず糞餓鬼。てめえ、ちったあ考えろ」

そう言つて、皓もまた温いお茶を飲む。

「静那が“自分”で選んだものを、他人のてめえに否定されるいわれはねえんだよ。それがてめえや、てめえの周りの人間にどんなに都合が悪かろうと、静那が決めた事に口を挿めるやつはいねえ」

皓の言葉に、若干冷静さが戻ってきた啓太はぐつと言葉に詰まる。
「口を挿んだつて仕方がねえ事の方が多い。そう言うもんじゃねえか。それを、てめえの都合が悪いからと静那を詰った所で、変えられるわけがねえだろうが。それも、てめえの気を鎮める為に静那に八つ当たりしやがつて、だらしねえ奴だな」

皓の言葉に、啓太は顔を紅潮させているが自覚があるらしく、何も言わない。

「まあ、キレて殴った俺もだらしねえけどな」

自身の行動を振り返り、そう呟いてくつと笑う。

「まあ、もう暴れんなよ坊主」

そう言つて、タマを見る。

タマはむつと眉根を寄せると同時に、ポチが口を開く。

「待て。その前に、この家にいる間だけでも力を封じさせてもらう。先程の様な事をされては、こちらもたままったものではないからな」
服や皓自身に燃え移らなかったから良いものの、と慥然とポチは
呟き啓太の額に触れる。

啓太は抵抗しようとするが、タマに押さえつけられ何もできない。
「これで良い。この結界から出れば、自動的に解呪される」

ポチの言葉にタマは頷き、啓太を開放して静那と皓の傍に控える。
「……火野家の少年。今回の事は、こちらが先に手を出したと言う
事で不問に処します。ですが、今度同じような事をなされば上の方
に報告します」

タマは冷たい声音で言い、言われた啓太はきゅつと唇を噛んで反
論しない。

皓はそんな啓太とタマを横目に見ながら、静那にティッシュ箱を
渡してふうと嘆息する。

今日一日だけでとんでもない出来事が怒涛のように押し寄せ、昼
過ぎだと言うのにすっかり疲れてしまった。

それを見ていた静那は鼻を噉り、そつと皓の頬に手を添える。

「旦那様……大丈夫ですか？」

やや冷たい手のひらが、慰撫する様に皓の頬を撫でる。

その感触に、皓は目を細めて苦笑を浮かべる。

「大丈夫だ。それより……」

こいつを如何するべきかと相談しようとするが、それより早く皓
のお腹が鳴く。

「あつ……お昼御飯ですね」

にこつと静那は笑い、いそいそと立ちあがる。

「お昼ごはんを作つてまいりますので、お待ちください」

静那の言葉に皓は頷き、ちらりと啓太を見る。

啓太は静那と皓のやり取りを見て、やはり悔しそうな表情を浮か
べながら床を見ていた。

第十話（後書き）

啓太くんはお子様で、皓さんは熱血さんになってしまったですよ。退魔組織に所属する一族等も出てきましたが……詳しい説明は居るのでしょうか？

一応、きちんと設定はしているので書こうと思えば書けます。ただ、一話潰してまで書くつもりはないので、後書きか活動報告辺りに書く方がいいのかなと悩ましいですね。

まあ、ぶつちやけ誰得な感じなので書かなくても良いですかね？何かご意見がございましたら、いただけると大変嬉しいです。

第十一話

皓はテーブルに置かれた大皿に、ほかほかと湯気を立て、海苔に包まれ三角に成型されたそれが大量に乗せられているのを啞然と見る。

添え物の様に皿に乗せられている厚焼き卵もほかほかしており、大変美味しそうな匂いを立てている。

「……誰がこんだけの握り飯食うんだよ」

思わず呟くと、タマとポチが皓を指さす。

「俺かよ……」

大量に食べる人間でも、三つも食べればそれで飽きる。

胡乱とした表情を浮かべながらもちらりと静那を見れば、静那はやや腫れぼったい目蓋をしているがニコニコしながら皓が食べるのを待っている。

昼だから仕方が無いと皓は諦め、いただきますとおにぎりを一つ手に取り口に運ぶ。

「む……」

思わず皓は唸り、モリモリとおにぎりを頬張り始める。

空腹は最高の調味料とは良く言うが、それを超えた美味しさがあ

る。握り具合と塩気が丁度良く、米本来の美味さを邪魔せず引きたてる。

中の具はおかかで、それもまた米の美味さと調和して今まで食べた事が無いほど美味いと感じた。

「静那……握り飯作るの上手いな」

内心、流石おにぎりの巫女等と思っているのは内緒である。

褒めながら二個目を平らげていると、啓太が目に入る。

彼もお腹をすかせているのか、大量のおにぎりが乗った皿をじつと見ていた。

「おう、忘れてたな。腹減ってるだろうから、食べ。タマとポチも、飯にしろよ」

一人で食べているのに気が付いた皓はそう言って、差し出された味噌汁を啜る。

「我々は、通常の食事をとらずとも大丈夫ですのでお気になさらず」
タマはそう言い、今日買ってきた物をしまう作業を台所で始める。
ポチもまた、静那の服を片付けに奥の部屋に行き、この場は静那と皓、それに啓太の三人である。

啓太は食べても良いと言われ、躊躇いながらも空腹に負けて手を伸ばす。

流石育ち盛り、等と皓は思いつつ口を開く。

「飯を食う時の挨拶くらいしろ」

啓太はその言葉にむっとした表情を浮かべるが、小さな声でい
だきますとayingっておにぎりを食べ始める。

静那は啓太の分の味噌汁も用意して、自身もおにぎりを頬張り始
める。

それぞれがおにぎりを食べ始めると、リビングは酷く静かになる。
静那は食事中にあまり話をする方ではないし、皓もご飯を食べる
時は話しかけられない限り無言である。

啓太は皓や静那に話しかけるよりも、お腹を満たす方に関心が行
ってしまっていた。

しばらく味噌汁を啜る音や、箸が動く音だけが室内に響く。

一番先にひと段落ついた皓は、お椀の中の味噌汁を飲み干してテ
ーブルの上に置く。

「美味かった。ごっそさん」

そう言って、ソファアの背凭れに体を預ける。

「おそまつさまでした、旦那様」

静那はそう言って微笑み、またもぐもぐとおにぎりを頬張り始め
る。

「しかし……静那は、ツナマヨとか鮭マヨ、梅おかとか嫌いな

か？」

素朴な疑問といった様子で、皓が問いかける。

静那はむぐむぐと口を動かしながら小首を傾げると、皓はむっと眉を顰める。

「握り飯の具の事だ。梅とおかかしかなかったからよ……ツナマヨや鮭マヨ、それにカルビやら豚の角煮も、具になるんだぜ？」

皓の言葉に、唾内のおにぎりをごくんと飲み下し、静那はコクコクと頷く。

「この次は、作ってみます」

静那は嬉しそうに笑い、皓にそうかと返事を返す。

「ああ……まあ、あれだ。普通の飯でも良いんだからな？」

おにぎりばかりを食べさせられるのは、流石に勘弁して欲しいと慌てて言い添える皓。

「はい、旦那様！」

笑顔で静那は頷き、手に持っている残り少ないおにぎりを頬張る。大皿に乗っていたおにぎりは最後の一つになり、それを啓太が手に取る。

静那は啓太が一瞬此方を見たのに気が付き、にこっと笑いかけて味噌汁で流し込む。

「ごちそうさまでした」

静那はおっとりと食事を終え、大皿と皓と自分のお椀を台所に下げ。

「……ごちそうさまでした」

小さな声で啓太が言い、静那は笑顔でおそまつさまでしたと答える。

「んでまあ、坊主。一応聞くが、この後はどうするんだ？」

静那がお茶を淹れてくれたので、それを飲みながら皓は啓太に問いかける。

「……静那さんが、担い手を得たと家の方に知らせに行く」

無然とした声音だが、憤った様子が無い。

「そうか……まあ、気をつけて帰れよ」

皓はそう言っつて、苦笑する。

啓太は皓の言葉にますます憮然とした表情を浮かべ、問いかける。「なんでそんな事を言っつんだよ」

皓は啓太のその質問に、ふつと笑う。

「んなもん、てめえが餓鬼だからに決まっつてるだろっつが」
子供だと言われ、啓太はじろりと皓を睨む。

その表情にくつくつと皓は笑いながら、口を開く。

「まあ、何にせよ名前くらいは教えて行け。自己紹介は人に任せる
なんざ、てめえは何さまだっつて話になるぞ」

皓の言葉に、啓太はますます渋面になりながら口を開く。

「火野、啓太」

今までタマヤポチ、そして静那が彼を呼んでいた苗字と名前を啓
太自身で名前を名乗る。

「おう。俺は窪塚皓だ」

皓が自己紹介をすると、啓太は驚いた様に顔を上げる。

「窪塚……？」

訝しげな声音に、皓は眉を顰める。

「ああ……」

皓も訝しげに頷くと、啓太は緩く頭を振る。

「僕の知っている人と同じ苗字だと、思っただけだ」

啓太の返事に、皓は苦笑する。

「こんな苗字、良くあるだろっつが」

皓の言葉に、啓太はそれもそうだと頷く。

「取り敢えず、僕の用事は終わっつたから、お暇させて貰っつ」

啓太はそう言っつて立ち上がり、見送ろうと立ち上がる静那を見る。
「静那さん、朔夜さんの様な事にならない様に気をつけてください」

啓太の言葉に、静那が体を震わせ動きが止まる。

皓はその様子に眉を顰めて啓太を睨むが、啓太は無表情で頭を下
げて出て行っつた。

「静那」

皓は取り敢えず、固まったままの静那の名を呼ぶ。

だが、彼女は返事もせず身動き一つしない。

むっと皓は眉を寄せ、静那の肩を掴んで振り返らせて目を睜る。

静那の顔は強張り、泣きだしそうにも笑いだしそうにも見える表情を浮かべていたからだ。

今度会った時に啓太をシメる事を心に決めつつ、皓は仕方が無いと嘆息する。

痛々しい表情を浮かべる静那をタマヤポチに預ける気にもなれないので、静那の頭を撫でて口を開く。

「笑うなり泣くなり、感情を出せ。何を言われたんだか知らねえが、お前十六なんだからもちつと子供らしくして良いんだぞ」

幼い子供に言い聞かせる様に、皓はそう静那に言い聞かせて頭を撫でてやる。

静那はその言葉が聞こえたのか、ゆっくりと落ち着いた様な表情へと変わっていく。

だがしかし、その雰囲気は硬く、裡に籠っているかのようで皓は眉間に皺を寄せる。

いつそ泣いてしまった方が静那の為に良いだろうと、がしつと頭部を掴んで胸に抱き寄せる。

「泣きたいなら、泣け。無理すんな」

世話が焼ける、などと小さく呟きつつそのままの体勢でいると、そつと静那の華奢な手が皓の服を掴む。

それを切っ掛けとしたように、静那が小さく体を震わせ始める。

静那の顔を押しあてた所は水に濡れ、熱い息を感じる。

だが、嗚咽だけは漏らさぬよう噛み殺しながら、静かに泣いている。

まるで、自分には泣く資格など無いと言っかのような様子に小さく息を吐きながら、皓は静那の頭を撫でつつけた。

第十一話（後書き）

おにぎりのみこだから、おにぎりと掛けた話。

基本、花嫁修業もしていたから料理とかはできるよ！ と言っお話なのであります。

ちなみに、自サイトで更新している分まで追いついたので今月あと一回更新して後は月一に変わると思います。

基本、遅筆なんです……私。

一応まだまだ掲載する余裕はあるんですが、基本ペースを自サイトに合わせて行くのでご了承ください。

感想等がございましたら、是非よろしくお願いいたします。

第十二話

ふと気が付けば、腕の中で静那が力を抜いて体を委ねてきていた。それと同時に、すやすやと言つ寝息まで聞こえて皓は思わず苦笑する。

「本当に、餓鬼だな」

泣き疲れて眠ってしまった静那を見ながら笑い、皓はしっかりと静那を抱き上げる。

このままの体勢で眠らせるより、布団に入れてやった方が良さそうだろと立ち上がると、丁度静那の服などを片付けたりらしいポチがドアを開けてマジマジと静那と皓を見比べる。

「……婿殿、もう本契約を結ぶ気か？」

ポチの問いかけに、顔を顰める皓。

「さて、誰がそんな事を言った……ってか、泣き疲れて寝ちまったからよ、取り敢えず俺のベッドに寝かせるかと思っただんだよ」

皓の言葉に、ポチはなるほどと頷き口を開く。

「やはり、寝所は一緒に問題ないのではないか？」

ポチの言葉に、皓が一瞬目眩を覚える。

この犬耳美女の考えている事がなんなのか、全く読めない。

「んなこと今はどうでもいいだろうが……それより、静那の部屋に布団を敷け」

自分のベッドに寝かせると言ったらとんでもない返事が返ってきたので、皓は静那の部屋に寝かせる事にする。

「ふむ。婿殿は、今どきの若者とは違うのだな」

などと何やら年寄りくさい事を言いつつ、ポチは部屋の中に戻り布団を手早く敷く。

「俺にだってな、気軽に手出しできる女と、出来ない女の区別はついてるんだよ。静那は軽々しく抱いて良い女じゃねえ」

皓はそう言っつて、嘆息する。

「こんだけ無邪気に慕われたんじゃ、変な気を起こす方が悪いっつ
ー気にもなるしな」

皓の言葉に、ポチは数度瞬いてからくすりと笑う。

「婿殿は案外、良い夫、良い父になりそうだな」

ポチの言葉に皓は渋面を浮かべ、ガシガシと頭を掻く。

「んなもん、なつて見ねえとわかんねえよ」

無然とした声音で呟き、皓は静那を布団に寝かせて毛布を被せて
から部屋を出る。

ポチもまた、静那をゆっくりと寝せる為に部屋を出て扉を閉める。

「おや、火野家の少年は帰ったのですか」

そう言いながらタマもリビングに入ってきて、皓を見る。

「ああ」

タマの質問に頷いてから、皓はソファーに座って向かい側に立っ
ている二人を見る。

「お前らに聞きたいんだが……朔夜って誰だ？」

皓の問いかけに、ポチが目を丸くしタマが笑みを浮かべる。

「お嬢様に聞かれたのですか？」

タマの威嚇する様な声音に、皓はニツと笑う。

「静那本人が言ったなら、泣き疲れて寝たりしねえだろうな」

皓の言葉にむっとタマが眉を寄せ、ポチは努めて無表情を装う。

そんな二人の表情に、皓は笑みを消してゆっくりと背中をソファ
ーの背凭れに預けて無言で睨みつける。

皓のその鋭い視線にポチがふるりと震え、タマは表情を強張らせ
ながらポチを背中に庇う。

「聞いてどうなされるおつもりで？」

タマは若干震える声音で、そう皓に問いかける。

「お前なあ……」

皓は低く呻き、額に手をあてる。

「押しかけてきておいて、何かトラブルを抱えていても気にするな
って言うのか？」

皓の言葉に、うつとタマが詰まる。

「てめえらは俺を静那の旦那にしたいんだろ？ だったら、少なくとも事情をちったあ話すべきじゃねえのか？」

静かに問われた言葉に、タマもポチも反論できずに沈黙を保つ。

「取り敢えず、座れ」

その二人に嘆息をして、皓はその場に座れと顎をしゃくり、タマは頷きポチを促してその場に腰を下ろす。

「まあ、今日来ててめえらを安易に信じる程俺は出来ちゃいねえ。

だがな、少なくとも静那は信頼に値する。あれで腹に一物持っていたら、俺は女性不信になるぞ」

皓の言葉に、タマは思わずふっと笑ってしまふ。

居間の空気が酷く硬く、息苦しささえ感じる程だったのだが、皓はそれを和らげてくれたのだ。

「無論、お嬢様は無垢で在らせられますから」

タマはそう言って、背筋を伸ばして皓を見る。

「お話は、私が。ですから、どうかポチはお嬢様に着いていてください」

タマの言葉に、皓は頷くがポチは弾かれた様に顔を上げる。

「だがっ！」

震えた声音と、若干青ざめたポチの様子に皓が訝しげに眉を顰めると、タマが苦笑する。

「婿殿。貴方は強いと、申し上げたはずですよ。その力を無意識にとはいえ、私とポチに向けられましたので……ポチは強い使い魔ですが、それでも貴方には敵いません」

皓にとってはピンとこない説明でも、自分が腹立たしさを持って二人を睨みつけた時かなりの重圧を感じさせたのだらうとは見て取れた。

「私はポチよりも多少は強いので、まだ耐える事は出来ます。ですが、婿殿の純粋な力は彼女にはきつい」

タマの重ねて言う言葉に、皓は頷く。

「まあ、気分悪いっつーのもあるんだろうしな。ポチは静那の所へ行っている」

皓に許され、ポチは渋々小さく会釈をして部屋を出て行く。居間に残ったタマと皓はテーブルを挟んで向かい合い、居住まいを直す。

「朔夜……様は、静那様の姉です」

ポチが、少々陰鬱な声音で呟く様に口を開く。

ポチの言葉に、皓の眉が僅かに上がる。

皓が受けた説明では、木崎の長子が退魔の武器になると言うものだ。

だと言うのに、静那には姉がいると同じ口で言われ、皓は胡乱とした表情を浮かべる。

タマはその表情の変化に僅かに苦笑してから、目を伏せる。

「朔夜様は木崎の長女にして生まれながらの『鬼切の神子』。お嬢様は、朔夜様が生まれてから五年後に木崎の次女として生を受け、朔夜様を補佐する為にその力を磨かれておりました」

意図して感情を見せないようにと語るタマの言葉に、皓は黙って耳を傾ける。

「朔夜様はその素質と努力で、歴代の神子としては十指に入るほど優秀で在られました。十六歳で成人し、直ぐに己の担い手である伴侶を見つけたのが五年前」

タマの声音に、僅かに変化が現れる。

「そして」

逡巡する様な、どこか悲しさを秘めた声音。

「お隠れ遊ばせたのが、三年前の事です」

古い言い回しで、タマは皓に告げる。

皓はその言い回しに一瞬考える様な素振りを見せてすぐ、眉根を寄せる。

「その、『鬼切の神子』とやらは死なねえんじゃねえのか？」

皓の問いかけに、ゆるりとタマは頭を振る。

「いいえ。鬼には殺されなくとも、人の手により殺される事があります。特に現在は殺人や事故など、人的被害が多いですから」

タマの言葉に、皓は何も言わずに唸る。

「『鬼切の神子』が害された場合、その身の裡に宿りし『鬼切』は弟妹がおればそちらに移り、いなければまた先代『鬼切の神子』に戻られるのです」

タマはそう言って、皓をまっすぐに見る。

「お嬢様は、朔夜様よりも遥かに強い素質をお持ちになられています。『鬼切』、いえ『鬼斬』と言ってよい程の強さは、おそらく歴代の神子の中でも五指……いえ、三指に入るほどでしょう」

一旦言葉を切り、タマは深呼吸をする。

まるで自身を落ちつける様なその仕草だが、皓は特に口を開かず
にタマの言葉を待つ。

「ですが、お嬢様はその能力とは裏腹に、脆い部分がございます。

ですからどうか、婿殿。お嬢様を、静那様を支えてください」

そつと床に手を着き、タマは頭を下げる。

突然土下座をされた皓は眉をひそめ、嘆息する。

「……取り敢えず、頭上げる」

皓は呆れた様な声音でそう言い、タマはそれに従い頭を上げる。

「まだ、会って半日足らずの奴に土下座なんかすんな」

皓は苦笑を浮かべながら、ソファアの上で足を組む。

「まあ、強制的に組まされた相棒だが……子供らしくねえ泣き方を
するのは見てられねえからよ」

やや照れたように頬を掻きながら、皓は笑う。

「俺で出来る範囲で、やれる事をするつもりだ」

強制的に受け入れをさせられた様なものだが、静那の無垢さには
庇護欲をそそられて仕方がない。

妹を持つ兄の様な心境になりながら、皓はタマを見る。

「取り敢えず、朔夜の事はもう良い。静那が何であるんなのかも、
あいつ自身が言うまでは聞く気がねえ」

だから安心しろ、と言い置いてから皓は苦笑を浮かべる。

皓の言葉に、タマは安堵の表情を浮かべている。

そのタマに、皓は口を開く。

「んじゃま、あれだ……面倒くせえが、これから俺がやらなきゃなんねえ事をきつちり聞いておかねえとな」

ガシガシと頭を掻き、退魔の仕事やその組織についての事を教えると、皓はタマを見る。

タマは切り替えの早い皓の言葉に一瞬驚くが、直ぐに表情を改める。

退魔の仕事、鬼切の事、そして火野啓太や彼らが所属する一族の事など教えなくてはならない事は山の様にあるのだ。

それを皓の方から切り出した事に、彼が相当静那の担い手として前向きに検討してくれている事に気が付く。

タマはその事に思わず笑みを浮かべ、頷く。

「判りました。では、これから退魔の仕事に関する勉強をいたしましようか」

わざと子供に言い聞かせるように言いながら、タマはテーブルの上に手のひらを滑らせる。

すると、テーブルの表面が微かに揺らめき幾つかの映像を浮かび上がらせる。

「……なんかのファンタジー映画みたいだな」

等と皓が呟く言葉に、タマは思わず噴き出した。

第十三話

タマのスパルタとも言える知識の詰め込みに頭痛を覚えながら、皓はぐったりとしながら水を飲む。

その姿を見ながらタマは喉を震わせ、忍び笑いを思わず零す。

タマの表情に皓は胡乱とした表情を浮かべ、溜め息をつく。

「お前、スパルタのくせして説明が回りくどいんだよ」

皓の呟きに、むっとタマは眉根を寄せる。

「如何言う意味ですか？」

判りづらいのかと問い返すと、皓は小さく唸ってから口を開く。

「……言い回しが古くせえ時があつて、理解するのが遅れるんだよ」
無然とした言葉に、タマはむうっと眉を寄せる。

「お前の周りの奴らは慣れてるんだとは思つが、俺はほぼ初対面だから……理解が遅れるのは当然だろうが」

自分の言葉遣いを振り返り始めたタマに、皓は取り敢えずそう言つて水をもう一口飲む。

すると、からりと静那の部屋の襖が開きそこからポチが顔を覗かせる。

「こちらも終わったぞ」

ポチの言葉に二人はきよとんとした表情を浮かべると、静那が中から空になったグラスを乗せたお盆を持って出てくる。

「い、いつ起きたんだ？」

皓が問いかけると、静那はにこっと笑う。

「だいぶん前に起きましたので、ぼちとおべんきょうしてました」
静那の言葉と、彼女の持つお盆にタマはがっくりと肩を落とす。

「気付かなかつた」

タマの呟きに、皓も同意して思わず頷く。

「二人とも、水も飲まずに勉強に熱中していたからな。こちらも気付かれないようにするのは当然だろう」

わき目もふらず怒鳴り合う様なやり取りをしているのを、勉強に熱中していたと言うポチに皓は胡乱とした表情を浮かべていると、静那が麦茶を入れたグラスを持って皓の前に置く。

「旦那さま、おつかれさまです」

静那が笑顔で労ってきたのに、皓は苦笑を浮かべてその頭をくしやりと撫でる。

「おう、静那も疲れただろ」

皓に頭を撫でられ、静那は嬉しそうな表情を浮かべながら素直に頷く。

「はい。でも……高校のおべんきょうは楽しいです」

静那の声は嘘を言っていないので、皓はそうかと目を細める。

「それなら、大丈夫だな」

皓の優しい声音に静那はますます嬉しそうな表情を浮かべ、コクコクと頷いて口を開く。

「はい！ でも……この次は、ご一緒におべんきょうをしたいです！」

静那が必死な表情で皓に言うと、皓は苦笑を浮かべてそうかと頷く。

「んじゃま、次から一緒でな」

年相応か、それよりも幼く見える表情を浮かべた静那の頭を撫でる皓。

あからさまな子供扱いなのだが、静那は全く気にする様子も無く笑顔で頷く。

「はい！ 旦那様！」

余りにも嬉しそうな表情に、皓は何がそんなに嬉しいのかと思いつつも泣かれるよりは良いかと笑みを浮かべて頭を撫で続けている。ほのぼのとした空気が流れる中、皓のお腹が物凄い音を立てる。

その音に、皓は苦笑を浮かべる。

「わりい、腹減った」

きょとんとした表情を浮かべていた静那は、直ぐに笑顔を浮かべ

て立ち上がる。

「はい、御夕飯をしたくいたしますね！」

お盆を抱えて、静那はぱたぱたと台所へと走る。

先刻の事を引きずっている様子が見えないその様子に、皓は安堵した様な表情を浮かべて頷く。

「ああ、美味しい飯頼むぜ」

「はい！」

台所から聞こえる元気の良い返事に、皓は知らず笑みを浮かべてソファーに深く座り背凭れに体を預ける。

タマとポチは一日でこれほどまで馴染んでしまっている皓の柔軟性に驚くが、それ以上に静那が心から笑っている姿に安堵を覚える。朔夜が死んでから、静那の笑みは何処か陰っていた。

だがしかし、皓と逢ってから静那の陰りはなりを潜め、三年前の様な明るい笑顔を浮かべている。

それが、タマとポチにとってはとても嬉しい事だった。

第十三話（後書き）

土曜日に投稿しようと思ったのですが、今日にしました。大体第四週の日曜日が土曜日に投稿しますので、これから先どうぞよろしくお願いいたします。

人物紹介

火野啓太《ひの けいた》

何気に、静那と同じ年の16歳。

タマやポチに対して随分と見下し気味で、物凄く偉そう。

でも、静那には物凄く丁寧な物腰。

皓に対しては物凄い敵愾心を持ち、キャンキャンと噛みつく。

かなり感情的で、沸点が低い。

静那に対して何らかの気持ちを持っている様子だが、かなり捻じれている。

黙っていれば、やや甘い顔立ちをした美少年に見える。

元素使い、火野家の跡取り息子。

兄弟は居るっぽい。

第十四話

勉強が終わると同時に普通のテーブルの天板になったその場所に、静那が次々と夕飯のおかずとご飯、味噌汁を並べて行く。

やはり和風の食事で、皓は感嘆の溜息を吐く。

皓は一人暮らしを始めてから自炊はしていたが、仕事などで疲れた時は在り合わせのものを買って済ませると言う事が多かった。その為、豊富なおかずで食事を取ると言うのが全く出来なかった。実家にいる時よりも豪華な夕食に、皓は嬉しいがある意味複雑な心境である。

押しかけ女房を歓迎するつもりは全く無いと言うのに、こうして食事の支度をしてもらうとまあ良いかと思ってしまう。

現金すぎる思考に軽い自己嫌悪を覚える訳なのだが、静那の笑顔を見るとそれすら消えて行ってしまう。

嵌められていると脳内で呟きつつも、もう逃れられないのだからと腹を括って自分は自分で居れば良いと開き直る。

目の前に置かれた箸を取り、手を合わせる。

「いただきます」

「いただきます」

静那も手を合わせ、皓と同じ言葉を口にして食事を始める。

豆腐となめこの味噌汁は出汁が利いており、皓は自分の好みの味である事に目を細める。

その後には白菜のお浸しと、鶏大根の煮物を皿に取り分け食べる。

これらもやはり良い好みの味で、皓は美味いと呟いたっ切り夢中になってしまう。

静那はそんな皓の姿に嬉しそうにしながらも、ゆっくりと食事を取る。

ある主対象的な食事風景をタマとポチは眺めていると、かたりと棚の上に置いた桐の箱が鳴る。

なんの音かと皓は箸を止めて箱の方を見ると、ポチが気にせず食事を続けてくれと告げて箱をタマの前に持っていく。

気にしないでくれと言われても、皓は気になる訳でそれをじーつと眺めていると。

「旦那様」

と、静那におっとりと呼ばれる。

「如何した？」

皓は静那を見ると、彼女は小首を傾げる。

「お口に合いませんでしたか？」

静那の問いかけに、皓はいやつと頭を振る。

「あいつら、何をしているのか気になってな」

皓の疑問に、静那はおっとり微笑む。

「あの桐の箱は、ものをなかに入れてから二度叩くと、なかのものをつい箱にうつす転移の箱なのです」

静那の説明にへえつと声を上げかけ、皓は目を丸くする。

「……それは便利っちゃ便利だな」

ファックスを使うよりも便利なものなのだが、今の科学ではそのような物を作れる技術は無い。

これもまた妖が作ったものなのだろうと皓は思いつつ、気にしないように努める事にする。

原理が気になるのだが、聞いた所で理解できないだろう。

むしろ、理解してしまったらなんだか戻れなくなりそうな気すらしている。

そんな事を悶々と思いつながら食事を続けていると、タマが小さく息を飲む。

皓はそれに気が付くが、タマとポチは二人で立ち上がり、小さく会釈をして部屋を出て行ってしまふ。

「如何したんだ？」

皓は味噌汁で口の中の物を流し込んでから呟くと、静那はおつとりと小首を傾げる。

「なにかあったのだと思います……けど……」

そこまでは分からないと、静那は困った表情を浮かべている。

「まあ、飯をさっさと食って聞くしかねえな」

皓はそう言つて、からの茶碗を静那に差し出す。

静那は皓のその食べっぷりに嬉しそうに笑みを返し、茶碗を受け取る。

「はい、旦那様」

いそいそと横に置いてあるお櫃の蓋を開け、しゃもじを持って茶碗に盛りつけ始める静那。

その姿を見ながら、タマとポチの先程の表情を思い返す皓。

あまり表情を変えないポチが、いつもより少しだけ焦っているように見えたのが気にかかる。

また、タマも酷く不機嫌そうな表情だったのを考えれば、あまり良い知らせではないのだろうと予想が付く。

皓はこれからどんな面倒が待ち受けているのかと眉を潜め、深い溜め息を吐くと。

「旦那様？ 具合、悪いですか？」

と、心配そうな声音でご飯を山盛りにした茶碗を持つ静那が声をかけてくる。

「ん？ いや、ちっと考え事をしていただけだ。気にすんな」

眉尻を下げ、心配そうな表情をする静那ににっと笑んで、皓はご飯を受け取る。

「わりいな」

静那に気が付かなかった事を謝ると、彼女はフルフルと頭を振ってふわりと微笑む。

「いっぱい食べたべてくださり、嬉しいです」

本当に嬉しそうに笑う静那に、皓もまた笑顔を浮かべ彼女の頭を撫でる。

「静那も一杯食べよ」

「はい！」

元気に返事をする静那に優しく目を細め、皓は茶碗に山と盛りられたご飯に箸をつけた。

第十四話（後書き）

なんかもう、適当に更新。

閑話に近い短さだけど、取り敢えずマツタリと見守って頂けると嬉しいです。

第十五話

夕食後、ゆつくりとお茶を飲んでいるとタマとポチが音も無く現れる。

「申し訳ありません、婿殿。早速ですが、お時間をください」
膝を着き、頭を垂れてタマが言葉を紡ぐ。

まるで従者の様な二人の姿に、皓は眉を潜める。

「堅苦しくすんな、気持ちわりい。何時も通りにしてろ」

今更格式ばった事をするなど皓は言い、お茶を飲み干す。

「んで、俺はどうすりゃいいんだ？」

皓の問いかけに、ポチがいち早く何時もの様に正座をして顔を上げる。

「長達が、婿殿に会いたいとおっしゃっている」

ポチの言葉に皓は片眉を上げ、憮然とした表情を浮かべる。

「てめえで来いと言ってえが……仕方ねえ」

そう言っつて、皓は立ち上がる。

「恰好は適当で良いのか？」

一応偉いさんに会うのであればと問いかける皓にタマも顔を上げ、いつも通りの表情になる。

「衣装は此方でご用意いたしましたので、安心なさってください」

そう言っつて、大丈夫だと促す。

「……仕方ねえな」

タマの言葉に嘆息して頷き、腕を組む。

「んで、何処に行くんだ？」

そう問いかけると、静那が立ち上がる。

「おささま達がいらっしやるのは、いわやです。ふじさんろくのじゆかい、その奥にあるふじのいわや」

さらりと静那が口にした言葉に、皓は目を丸くする。

「青木ヶ原樹海に入るってのか!？」

心霊スポットで、毎年多くの自殺者が中に入り行方不明になると言う事で有名な富士山の名所である。

「わざわざ樹海から入る様な事はしない。“道”を開き、そこを通るだけで岩屋まで行ける」

ポチは淡々と説明し、立ち上がる。

そのまま昼間に静那の荷物を運んできた窓に手を当てると、表面がゆらりと揺れる。

「道は、我々が開きます。行きも帰りも我々がお嬢様と婿殿を守り、従います」

何時も通りの口調と表情でありながら、その言葉には何処か強い決意がある。

「おいおい、退魔とやらの総本山なんだろう？」

言葉の端々にある何処か不穏な空気に気が付き、皓は眉を潜めて問いかける。

タマは皓の問いかけに一瞬息を飲み、それから口を開く。

「確かに、その通りです。ですが……ここ数代、木崎の御子は全て退魔に関わる血筋からではなく、外に担い手を求めました。それ故、組織では外の担い手に害を成そうとする人間が多いのです」

タマが語ったその話に、皓は一瞬目眩を覚える。

「それは……本末転倒なんじゃねえのか？」

そもそも、退魔の為の力をいかになく発揮する為に選ばれる者を、退魔の力を扱う他の人間が排除しようとするなどとするなどでもない話である。

皓の言い分に、タマもポチも頷く。

「はい。我々もそう思います」

激しいまでの同意を示すのだが、いかんせんそれをしつかりと理解できる冷静な人間が殆ど居ないと言うのが現状らしい。

「そもそも、先祖代々退魔の力があると言う事が彼らの中にある種の選民意識を植え付けたのが、衰退の始まりだったのでしょうか」

小さく、タマが呟く。

退魔の組織の歴史は、古くは飛鳥時代からだと言う。

厩戸皇子が作ったとも言われているらしく、かなりの格式を持つとタマが説明すると皓はあっさりと言う。

「長く閉じてりや、淀むもんだ。それを如何にかするのは、中に居る奴らなんだがなあ」

現状の組織内の様子を、皓は聞いただけで理解した。

むしろ、それは人にとっては予測できる事態だったのだろう。

それを打破するのは代々の人間であろうと思わずばやく皓に、タマもポチも何も言う事はできない。

同じ事を思っけていても、口出しする事は使い魔と言う立場上出来ないのだ。

もつとも、退魔組織の中でも木崎はある種特別の位置にある。

長子にしか受け継がれない退魔の武器へと変じる力は元より、その弟妹達の力も抜きんでて強い。

組織の其々の一族に連なる者達は、木崎の血と力を欲して様々なアプローチをして来るほどである。

だがしかし、鬼切の一族は己の子供達には退魔の仕事をさせる以外の事柄は本人の好きにさせている。

組織の誰かの元へ嫁いでも良し、表の世界の人間へと嫁ぎ、退魔の仕事から足を洗っても良しと言い含めているのだ。

無論、その様な事を許している木崎は、ある意味彼らにとって頭の痛い一族である。

だがしかし、当主と次期当主である退魔の武具へと変じる長子とが所属し、その力を貸している以上文句を表だつて言う事は出来ないであった。

しかし、その家に仕える使い魔は別である。

力の強い使い魔であろうと組織にとっては【木崎の一族】ではないのでタマとポチは常に嘲られ、発言権すらないのである。

ギリツと唇を噛むタマに気が付き、皓は少し考えた様に目を伏せてから口を開く。

「なんか知らんが、取り敢えず頼むぜ。まあ……お前らは少なくとも今日来た糞餓鬼みたいな奴より信用できるからな」

皓はそう言つて、隣に立つ静那を見る。

「少なくとも、お前らは静那の家族みたいだしな」

ペットなどの関係ではないが、静那がこれ程信頼している姿を見る以上、家族同然なのだろうと皓は笑う。

「はい！ たまもぼちも、大切な家族です！」

静那は嬉しそうな表情で頷き、そつと皓に寄り添う。

その静那の頭をポンポンと撫でてから、皓はタマを見る。

「そんじゃまあ、嫌な事はとつと済ませちまおうぜ」

タマの様子から、総本山であろう場所はとても嫌な場所なのだろうと皓は当たりを付け、促す。

「信頼してるぜ」

皓はにやりと笑い、タマに立つように促す。

まるで友人と話をする様なその表情に、タマは驚き、ポチはきよとんとしてしまふ。

だがしかし、直ぐに二人は仄かに笑みを浮かべる。

「無論。婿殿に傷一つ付ける様な輩は近づけません故」

タマはそう言つて立ち上がり、ポチに頷きかける。

「ああ、婿殿が一番無防備だからな」

ポチはタマに頷き返し、凜とした表情を浮かべながら立ち上がり、窓際に寄る。

「では、道を開きます。私が先導しますので、着いてきて下さい」

タマはそう言いながら、窓の表面に触れる。

「我、鬼の血花を咲かす一族と契約せしモノ。清き聖場なる地へと道を開き、招き入れよ」

タマが触れている窓は、ゆらりと水のように表面が漣を作る。

仄かに光りながら窓ガラスの向こうの景色が歪み、揺れる。

「行きますよお嬢様、婿殿」

声だけかけて、タマは窓へとゆっくりと足を踏み出していく。

水の様にタマを受け入れ、窓ガラスが細かく揺れる。

それを見ていた皓は本当にSF映画の様だと眉を顰めながら歩き出そうとするが、それより早く静那がそつと皓の左手を取る。

「旦那様」

そろりと静那が呼び、不安そうな表情を浮かべる。

「……………一緒に行くか？」

静那が何を心配しているのかは分からないが、安心させる為にする提案する。

「はい」

静那は頷き、皓の手を引きながらゆっくりとタマを飲み込んだ窓へと足を踏み出す。

術や使い魔に慣れていない以上、静那は自分が先に行って安心させようと思ったのだが。

「一緒なんだろう？」

と言いながら、皓も同時に足を踏み出し、二人で窓に作られた門をくぐる。

ポチはそれを見届けてから、窓に作られた門に水晶屑を振りかけ自身も門をくぐった。

第十六話

一瞬の違和感の後は、直ぐにしつかりとした地面に足を置く事が出来た。

これが門かと思いながら、皓は数度瞬きをして家よりも暗いその場所を見回す。

明るい所から暗い所へと移動したせいで視界は悪いが、ゆっくりと目を慣らしながら静那に促されるまま歩く。

「こんな暗いなんて思わなかつたな」

皓が呟くと、静那がきゅっと手を握る。

「いつもは、もっと明るいです」

静那の返事に、そうかと皓は胡乱とした表情を浮かべる。

要するに、歓迎していないぞという意思表示なのだろう。

そう思い至った皓は呆れた表情を浮かべていると、前に居るタマが軽く手を振る。

タマのその行動だけで明かりが点き、皓は改めて彼が人外だと納得した。

そして、そのタマは不機嫌そうにぶつぶつと文句を言っている。

「まったく、この様な稚拙な嫌がらせをして……だから木崎の神子に選ばれないのですよ」

更に何かを言っているが、皓はあえて聞かずに明るくなった室内で目を瞬かせて目を慣れさせる。

「タマ」

そんなタマを諷める様にポチが名を呼び、タマはそれで正気に戻ったのか文句を止める。

「失礼いたしました。一度襷ぎをしてから、こちらで御用意した衣装で対面と相成ります」

若干恥ずかしそうな声音で説明を始め、目が慣れたであろう皓を促す。

「お嬢は此方へ」

ポチはタマが向かう方向とは若干違う場所へと促すが、静那はほんの少しだけ嫌そうなそぶりを見せる。

不安だと書かれたその表情に、皓は頬をポリポリと搔く。

「俺もだろうけどよ、静那の方も大丈夫なのか？」

タマやポチの話だと静那には危険が無い様子であったが、最悪の事態を予想しておいて損は無いだろうと問いかける。

「……おそらく、お嬢様の方は大丈夫だと思います」

タマは皓の問いかけに応えるが、どこか自信がなさそうだ。

皓は昼間に出会った啓太という少年の事を考えれば、やはり静那を一人にするのは不安である。

皓はそんな自分の心境に内心舌打ちをしつつも、口を開く。

「そんなに離れてねえンだろ？」

静那を見ながら、そう問いかける。

皓の問いかけに、静那は小さく首肯するがその表情は変わらない。「俺んところはタマ。お前ん所はポチがついて行くだ、そんなに不安がるな。な？」

皓は苦笑を浮かべ、全身から心配という雰囲気を滲ませる静那の頭を撫でる。

「でもっ……」

それでも不安だと言い出そうとする静那の表情に、皓はまた彼女の頭をポンポンと撫でる。

「ポチもタマも、お前の家族なんだろ？」

皓の問いかけに、戸惑った様な表情を浮かべながら静那は頷く。

「それなら、信頼できんだろ？」

皓の重ねた問いかけに、静那はしばしの間の後こくりと頷く。

使い魔であるが故に如何にもできない事は多い方なのだが、それでも皓は静那の家族なら大丈夫だと言ってくれたのだ。

静那は潤んだ瞳を皓に向け、はいと微笑む。

今までどこか緊張していたであろう静那だが、今のその微笑みに

は柔らかさしかない。

皓はその静那の様子にずっと笑い、また頭を撫でてからポチを見る。

「お嬢」

ポチは小さく会釈してから、静那をそつと促す。

「はい」

静那も皓に小さく会釈してから、ポチの案内する方へと静々と歩いて行く。

「後でな」

そう声をかけると、静那は足を止めて全開の笑顔を浮かべる。

「はい！ 旦那さま！」

静那の笑顔を見て皓は頷き、タマの後をついて歩き出す。

「お嬢様も、色々と婿殿の事が心配なのでしょう。それに、ここは性質の悪い魑魅魍魎が多いですからね」

タマは何故、静那があればほど心配しているのかを理解しているのでそう口にする。

「性質の悪い、ねえ……なんつうか、鬼とかと変わりねえ奴らばかりなんじゃねえの？」

片眉を上げながら、皓はタマの言葉に返す。

すると、タマは苦笑する様に肩を竦める。

「まあ、鬼どもは人間達の世界に対して災厄を撒き散らすしますので、まだこちらの魑魅魍魎の方が可愛げがありますよ」

等とタマはのたまい、皓はそうかとくつくつ喉を慣らす。

タマはよほどの場所に所属する、木崎という家の人間以外が嫌いの様だ。

「まあ、なんにせよ用心するに越したことはねえって事か」

皓の言葉に、タマははいと頷く。

「所ですよ。ここにはお前ら以外に使い魔ってえの、どれくらいいるんだ？」

皓の問いかけに、タマは苦笑する。

「そればかりは、いかな私でも分かりませんね。使い魔を召喚し、使役する術を持つ一族が居ますから……そちらの方に聞いてみないと、分からないですよ」

タマの言葉に、へえっと声を上げかけて皓はタマを見る。

「まあ、私とポチは例外というか、少々特別なのですよ。そのお話はまあ、今私たちの主であるお嬢様のご両親からお聞きください」

タマは自分の口からは言う気が無いと、皓に対して告げる。

「……七面倒臭えなあ」

思わず皓はぼやき、タマは苦笑する。

皓のぼやきは、現状と後の事を考えたが故に出た言葉である。

今まで自由奔放に生きて来た皓ではあるが、突然自身の命と引き換えに様々な柵に雁字搦めにされてしまったのだ。

文句がもつと大量に出てもおかしくはない。

だが、皓はそれ以上文句も言わず黙ってタマについて歩く。

その事に驚きと同時に、少々不信を感じて口を開くタマ。

「もっと、文句を言われるものと思ったのですが」

タマの言葉に、皓は小さく笑う。

「言ったって仕方がねえだろ。今日一日で、そこは理解したしな」
それに、と皓は呟く。

「何を言った所で、現状はかわんねえだろ？ それならさっさと頭を切り替えた方が、得策だろ」

苦笑交じりの声での回答に、タマは足を止めて皓を振り返る。

思わずまじまじと見ると、皓は小さく眉を潜めてタマを見る。

「なんだその、珍獣を見る様な目つきは」

無然とした皓の声音に、タマはゆるく頭を振る。

「今朝とは別人なのではないかと、一瞬思っただけです」
そう言つと、皓はますます無然とした表情を浮かべる。

「お前から色々話しを聞きゃ、色々と諦めもつくだろうが」
皓の言葉に、はあと頷きながらタマは歩き出す。

「しっかし、随分と人がいねえな」

きよろきよろと周囲を見回しながら皓は呟く。

「皆、隠れて婿殿を見ているのですよ。新たな担い手がどの様な人物なのかを観察し、どうやって取り居るか、排除するかを考えているのでしょ」

タマの言葉に、皓は顔を顰める。

「バカじゃねえのか？」

素直な皓の感想に、タマはうんうんと頷く。

「私もそう思います」

と答えて居たタマが、不意に足を止める。

「此方が、襦の場です。ここで体を清め、こちらで用意した物を着ていただきます」

「面倒臭えが、分かった」

タマの説明に頷き、彼が示した戸を開けようと手を伸ばすが。

「ああ、お待ちください」

それだけ言つて、タマが皓より先に戸を開く。

「狡猾な悪戯があるやもしれませんので、私は襦ぎ場まで一緒にします」

タマの言葉に、皓は思わず胡乱とした表情を浮かべる。

「畏があるやもという話もありますが、何よりも婿殿は襦の仕方を知らないと思われまので我慢してください」

あっさりとタマは言い、皓は皓で不満はあるが口に出さずに黙つて従つ。

ここで口論しても、無駄だからだ。

皓より先に中に入り、安全を確かめてからタマは皓を招き入れる。中には脱衣所になっており、一つだけ置かれた籠には白い布が入っている。

タマはそれを一通り調べてから、皓に手渡す。

「こちらに着替えてください」

タマの言葉に、皓は何とも言えない表情を浮かべる。

「あのよ……着替えるのは分かった。だが、お前の目の前で着替え

るってことか？」

皓の問いかけに、タマは真剣な表情を浮かべて頷く。

「はい。それと、下着の類も全て脱いで着てください」

タマの言葉に、皓の表情はますます胡乱とした表情を浮かべる。

「風呂に入る見てえだなあ、おい」

皓の呟きに、タマは何も答えず早くしりと目で急かす。

皓は嘆息してから、がばっと服を脱ぎ始める。

タマはそんな皓の体を見て、感心した様な表情を浮かべた。

服を着ていると分らないが、瘦躯だというのに鍛えられたがっ

しりとした体をしていたからだ。

「意外と、体を鍛えていたんですね」

タマの言葉に、皓はああと頷く。

「小学からなんだかんだと、体動かすのが好きだったからな。剣道、空手、近所の武道館とかも通ったぞ」

服をバサバサと柵の上に無造作に置きながら、律義に皓は答える。

「まあ、真剣を使う居合い抜きとかも面白かったな……って、お前人の体じろじろ見るんじゃないやねえ」

あんまりにもマジマジと見るタマに、皓は思わずそう突っ込みを入れて下着を脱ぐ前に白い単衣を羽織る。

「下着も脱いでくださいと言いました」

「お前がじろじろ見るから脱ぎずれえんだよ」

タマの言葉に強く言い返しながら、皓はなんとか着替えを終える。

「ったく……」

舌打ちしながら、浴衣の様に白い帯を留めてタマの方に体を向ける。

「んで、何処行くんだ？」

合わせなどをチェックしているタマに、皓は問いかける。

「こちらです」

タマは皓を促し、入ってきた所と反対側の戸を引いて中を確認する。

何処までも用心深いその行動に皓は嘆息しつつ、タマの後に着いて行った。

第十七話

タマの警戒のおかげか、それとも別の理由があるかは定かではないが、無事に楔が終わる。

用意されていた水色の袴と白い着物を着せられて、皓は再びタマと歩いていた。

「しっかし……良く風邪ひかねえな、アレ」

楔の事を思い出して、皓は鳥肌を立てた首筋を撫でる。

楔場は岩場で、そこにこんこんと清水が湧く静謐と神性を湛える場所であった。

白い単衣一枚で清水の池へ入る為に作られた岩の階段を下りると直ぐに、水に触れた。

水は身を切るような冷たさで、皓は驚き思わず悲鳴を上げてしまった。

足先から頭の先まで入らなくては駄目だとタマに言われ、皓はそれでも冷たすぎるから嫌だと言っていると突き飛ばされて、池に落とされたのであった。

その後は十分程口喧嘩をしていた訳だが、流石に唇が紫になって来た皓を心配してタマが上がって良いと言ったのでそれは終わったのであった。

「婿殿なら、風邪など引かないでしょう。それに、あそこの水の冷たさは気を鎮めるためにも丁度良いのです。ちなみに、心臓麻痺など起こしても大丈夫なように私が控えておりましたので、ご安心ください」

しらっとタマは言い、皓は青筋を立てる。

「あのなあ、死んだらどうすんだよ」

「ですから、大丈夫だと言っているではありませんか。私がついていたのです、心臓麻痺を起こす前にきちんと治療いたしましたでしょう」

ちなみに、水から上がり、物凄く震える皓にタマは気付くとばかりに温かい白湯を飲ませた訳だが、これにタマはちよつとした術をかけており、直ぐに体が温かくなった。

「治療すりゃ良いってもんじゃねえだろうが」

怒っても何を言っても無駄だと悟った皓は、ため息交じりに言う。

「お前の感覚は、おかしいぞ」

「まあ、使い魔ですからねえ」

皓の抗議に、タマはしれつとそう答える。

「……お前、後で一発殴らせろ」

「媚殿の力で殴られたら、私はしばらく再起不能ですよ」

飄々とそう返事を返し、皓はこめかみをぴくぴくと引き攣るのを感じる。

「そろそろ、媚殿をからかうのもやめた方が無難そうですね」

本気で怒りそうな皓に気がついていたので、タマはそう言って手に持って居る蜀台を前に掲げる。

「それに、あの泉の冷たさは皆経験するものです。水精は、初めて訪れる者に対しては必ずと言って良い程不必要な程冷やして相手の根性を図るので、誰も止めないですよ」

タマの言葉に、皓はもはや何も言うまいと言う様に口を閉ざす。

その姿に、タマもやりすぎたかと肩を竦める。

「長老に会う時は、必ず楔をしなくてはなりません。逆を言えば、長老に会わないのであれば楔は必要ないのです」

励ます様に言うタマに、皓は首筋を撫でながらむつと唸る。

「その、長老とやらに会うってえのは……今回で最後か？」

皓の問いかけに、タマは何とも言えない表情を浮かべる。

「それは……正直、どうなるかは分かりません。確実に言えるのは、大きく特殊な仕事が回ってくる時には長老から説明があると言う事ですね」

タマの説明に、皓は胡乱とした表情を浮かべて口を開く。

「今ん所、そんなのねえんだろ？」

皓の問いに、頷くタマ。

「それに、長老方もそれほど暇ではございませんから……代理の使者が立てられる事の方が多いと思いますよ」

皓はタマの言葉に、そうかと安堵したように頷く。

「それより、そろそろ合流いたしますよ」

古びた木の廊下を軋ませながら歩いていると、タマが皓に声をかける。

それと同時に、薄暗い廊下の前方に、白と赤の色が見えた。

徐々に近づいて行けばどこか古めかしい着物を着たポチと、白い着物に緋袴を穿いた静那が見えた。

ちなみに、タマもポチと似たような着物を着ている。

「少し、遅かったな。お嬢が心配していた」

ポチはたまにその声をかけ、ちらりと静那を見る。

静那は若干顔色が悪かったが、今はふわりと微笑みを浮かべている。

「旦那様が、ごぶじでよかったです」

長い髪を紙で留め、見た目には巫女としか見えない静那の頭に手を乗せる。

「遅くなつて悪かったな」

素直にそう言えば、静那はふると頭を振り笑う。

「だいじょうぶです」

そんなに待つて居ないと告げ、自身の頭にある皓の手を取る。

「お手を、つないでよいですか？」

そつと問いかける静那に、皓はああと頷く。

自身が不安を感じているのと同じように、静那も不安を感じているのだろうと思ったからだ。

そんな二人のやり取りをタマは微笑ましげに見ていたが、ポチが若干沈んだ表情を浮かべていた。

「如何しました？」

二人に聞こえない様に小さく、タマがポチに問いかける。

「……後で良いか？ 今話せば、婿殿が不機嫌になる」

おそらく、皓の所ではなく静那の方に何か嫌がらせをされたのだらうとタマは悟り、頷く。

「分かった」

タマとポチを怪訝そうに見る二人に気がつき、タマは素早く口を開く。

「お呼びに従い、木崎とその担い手をご案内いたしました」

タマの言葉に、中から応えが返ってくる。

「入るが良い」

皓は、思ったよりも遥かに年若い声が聞こえた事に片眉を上げながら、タマは何も言わずに襖を開ける。

目の前に現れた光景に、皓は息を飲む。

蓮の花を咲かせる大きな池と、その中心に建てられた大きな離れ。離れへは緩やかな傾斜の橋がかけられており、色とりどりの蓮の花と何処からか差し込むほの明るい光。

今まで歩いてきた薄暗い廊下から、幻想的な光景に遭遇したと言うギャップで皓は目眩を覚える。

一瞬、別の世界かと錯覚してしまいそうになった。

その皓の手を握る静那は、そっと彼に寄り添う。

「旦那様……」

心配そうな声を上げる静那に、皓は正気に戻る。

「あ、ああ……悪いな」

そう言いながら、静那を見る。

幻想的な風景の中でも、静那はしっかりと存在感を持って秀麗な美貌に心配の色を滲ませていた。

皓はそんな静那にすんと気持ち落ち着き、思わず苦笑する。

「心配させたな」

ポンと頭を撫で、先導する様に前に立つタマに頷きかける。

皓の合図に、タマは歩き出す。

木の板がキシキシと軋むと同時に、仄かに明るい光が足元を照ら

す。

皓はふつと上を見上げると、この離れを中心とする様な大きな穴が上にあいていた。

そこから月明かりが差し込み、この風景を幻想的な美しさに彩っていたのだ。

同時に、今まで屋内の様な様子だった廊下や襖ぎ場が実は洞窟の中にあつたのだと気がついた。

随分と凝った作りになっていると皓は内心で感心していると、隣の静那がきゅっつと皓の手を握る。

まるで怯える子供の様に手を震わせているのに気がついた皓は、静那でも長老とやらに会うのが怖いのかと考え、元気づける様に手を握り返してやる。

すると、静那は驚いた表情を浮かべて皓を見上げ、次いで頬を染めて笑う。

伶俐な美貌を仄かに明るく照らす月の光は、その微笑をどこか艶やかに見せる。

胸が一つ、高く跳ねた。

と同時にタマが足を止め、口を開く。

「当代の神子とその担い手を、お連れしました」

普段はもう少し柔らかかみのある声が淡々と言葉を紡ぎ、中入室する許可を問う。

「入りなさい」

静かな声は、たおやかな女性の声。

許可と同時に、タマはゆっくりと皓と静那を見てから前を向き直し、襖に手をかけた。

第十七話（後書き）

中々話が進まないのは、何故なんでしょうねえ……。
取り敢えず、次はいよいよご対面です。

第十八話

室内であるが故なのか、外とは違い離れの中は廊下と同じ様に暗い。

しかし、暗闇の中に一つ、二つと小さな明かりが灯り始める。

蠟燭の炎の様な仄かな光はみるみる数を増やし、室内を照らす。

室内の壁と言う壁に並ぶ小さな灯りは、幻想的ではあるが何処か黒く澱んだ空気を醸し出していた。

その中に座している者達は、皓や静那と同じ様に袴に白い着物と言った姿である。

皓より少し年上と言った女性に、好々爺と言った雰囲気を持つ老人。

先の女性と同じか少し年上の様な印象を受ける男性と、精悍な壮年の男性が上座にて皓達を真っ直ぐに見ていた。

観察をする様な、品定めをする様な不躰な視線に皓の眉がピクリと動く。

タマやポチから聞いてはいたが、あまり良い印象を受けない事に呆れに似た感覚を抱く。

しかし、入り口で立って居ても始まらないので、腹を括って中に入る。

静那と皓を案内してきたタマとポチも中に足を踏み入れようとす
るが、それに気がついた若い男性は口を開く。

「使い魔は外で待機せよ」

静かな声音で命じる男性は、その表情に微かな嫌気を乗せている。

皓はそれだけでこの男性は嫌な男だろうと感じて顔を顰め、口を開く。

「良いじゃねえか。こいつらが居て不都合あんのか？」

皓の言葉に、ザワリと場の空気が波打つ。

それを肌で感じながらも、皓は動じる事も無くニヤリと笑う。

あからさまな挑発を含ませたその笑みと表情に、若い男性の顔が忌々しげに歪む。

しかし、女性と老人は楽しげに笑い、口を開く。

「木崎”に聞かれて拙い話など、せぬ方が良い”

女性はそう、諭す様に男性に告げる。

「然り然り、それに使い魔を締め出した所で“木崎”当主と次期当主の心証を悪くするだけとなるのであれば、この場に留め置いていた方が円滑に話は進もう」

表情は変えていないが、腹に一物持っている様な壮年の男性に、老人はそう言葉を添える。

年若い男性は表情を無へと戻し、老人と女性の言葉に返事をせず皓を見る。

壮年の男性はそんな三人のやり取り等意に介さず、皓を観察しながら口を開く。

「貴殿が新たな担い手か」

確認の言葉には、どこか侮りを含ませた色がある。

皓はそれを感じ取り、ならばと笑みをますます深くする。

「静那が俺を選んだって事なら、そうだと答えるぜ」

どこか人を侮ったような口調の男性に、皓は素直に諾と答える程大人ではない。

捻くれた答え方をする皓に、長老と呼ばれる者達はそれぞれの感想を目に浮かべる。

その中でも特大の敵意を剥き出しにしたのは若い男性で、敵意と言うよりも悪意を感じさせるのは壮年の男性だ。

表面上は静かにしているが、鬱屈した物をもっとも強く持っているのはこの男だろうと皓は分析する。

反して、老人はこの状況を楽しんでいる様な光を浮かべ、女性の方は困った様な雰囲気を漂わせている。

皓が取り敢えずどうやってこの目の前のお偉いさん達と話をするかと考えていると、隣の静那が動く。

「彦哉さま、都さま、和義さま、桂悟さま。お久しぶりです」

緊張した空気の中、おっとりとした静那の言葉が響く。

いつもどおりご挨拶をしたと言った様な表情と声音で、静那はにっこりと笑う。

「本日は、旦那様とご一緒でのおよびですがどうなさいましたか？」
「気負った様子も無く、ただありのままの疑問を口にさせる静那。すると、老人が珂珂と笑う。」

「何、静那嬢の旦那がどんな男か見たかっただけの事よ。わしの眼鏡にかなわなければ、悪しきものどもの餌にしてくれようと思うてのお」

楽しそうに笑いながら、老人は好々爺の表情になる。

「したが、中々胆も座った良い御仁じゃ。爺は安心したぞ」
手を叩いて褒める老人の言葉に、静那は嬉しそうに笑う。

「礼儀のなつていない男の何処が、良い御仁かは理解できぬ。翁」
そう言うのは若い男性で、女性はくすくすと笑う。

「無礼を為したのは、こちらが先でありましょう。だからこそ、それを返してきただけのこと。それをとやかく言う資格は、こちらにはありませんよ」

そう言つて女性は表情を改め、皓を見る。

「私はこの退魔組織の長老の一人、探知・先見を司る一族の長である敷島都と申す者」

女性は微笑みながら名を名乗り、ちらりと隣の老人を見る。

「右に同じく、長老の一人じゃ。わしは木崎を含む浄化の一族を束ねておる、御巫和義じゃ。静那嬢の担い手とあらば、わしとは一番よく顔を合わせるじゃろうて良しにな」

「かんらんからと笑う老人は、そう言つてから自身の斜め前に座っている年若い男性の肩を小突く。」

男性は嫌そうな表情で、渋々口を開く。

「長老の一人、元素使いの一族を束ねる。名は長岐彦哉」

簡潔に自己紹介をしてから、目を閉じ一切話をする気が無いのを

表明する。

「長老の一人である、吉嶋桂悟だ。封印や召喚・使役を司る一族の長をしている」

彦哉ほど不快感を露わにはしなかったが、桂悟もまた皓に対してあまり良い感情を持って居ない事を表す様な声音で名乗る。

「さて、窪塚皓殿。ぬしは“鬼切の神子”に選ばれたが故にこの場に召喚されたのだが、それは良いか？」

和義は徐に、理解できているかと問う。

「ああ。それは聞いたんだが……それ以外になんか用事でもあるのか？」

胡乱とした表情で、皓は頷きながらも問い返す。

正直、この会話だけでこの長老と言う者達が一癖も二癖もある人間である事は見取れた。それは、彼らも同じだろう。

それ故、これ以上ここに居て他に何か話す事はあるのかと皓は顔をしかめて問い掛けたのだ。

皓のその問いに、和義は笑う。

「此度の我らとの会見は顔合わせ程度だと思ってくれ。何せ、我らにとつては“鬼切の神子”が担い手を選んだと言うのは重要な事じゃからな」

そう言いながら、和義は皓と静那に座るように促す。

丁度皓と静那が二歩ほど進んだ所に座布団が置いてあり、皓は一瞬目を眇めるがすぐにそこに腰を降ろし胡坐をかく。

そうしなければ、静那も座らないだろうと思っただのだ。

皓の後に続く様に、静那も隣の座布団に正座する。

「顔合わせにしちゃ、随分と仰々しいな」

皓は素直な感想を口に乘せると、彦哉の眉がぴくりと動く。

「仕方なかつ。むしろはこれでも“お偉いさん”だからの
笑いながら和義は言い、都もころころと笑う。

「何はともあれ、“鬼切の神子”が担い手を選んだのは好き事です。たとえ組織の者ではなくとも、使い魔達の反応を見れば皓殿がお強

いのは一目瞭然」

良い事だと微笑みながら都は頷き、和義だけではなく彦哉と桂悟にも視線を送る。

「うむ。これで我らの一族も、少しは楽が出来る」

和義は良かった良かったと頷き、彦哉と啓吾は何も言わずに口を閉じている。

「なんか、その言い方だと扱き使われそうだな」

皓は思わずと言った様に突っ込むと、和義はうむと頷く。

「我らの一族は悪しきものの邪気を祓い清める能力を持っているが、数が少ない。まあ、詳しい話は木崎の使い魔達に聞くが良い」

そう言って和義が手を叩くと、奥の襖からするりと白い着物を着た少女が入ってくる。

少女の手にはお盆があり、その上には湯のみが乗せられている。

静々と皓と静那の前に進み出て、そっとお盆の上の物を置いてから和義の後ろに控える。

「孫娘の朱莉じゃ。わしの後継ぎよ」

和義はそう言って、朱莉に挨拶するように促す。

「御巫朱莉です、これから先木崎の方と一緒する機会が多くなるとおじ……司様より賜っております。どうぞよろしくお願いいたします」

三つ指を着き、静那よりもやや年上の印象を持つ朱莉が頭を下げる。

「ああ？ どういう事だ!？」

皓は初耳なので、思わず和義を見る。

「基本、我らは浄化の一族を中心に、元素の一族と封印の一族が組み悪しきものを退治する事となっている」

皓の疑問に、和義では無く彦哉が口を開く。

「悪しきものの浄化には、本来なら『殺す』と言う作業が必要になる。力で押し伏せ、自我を無くすのだ。その後、浄化の一族が祓い清める」

彦哉の説明に、しかしと補足するのは桂悟だ。

「浄化の一族の手が足りぬ時や、浄化するべき対象が強力であった場合は我ら封印の一族が物に封じ、のちに強力な力で清めるという作業をする。また、我らは使役の一族も兼ねているが故に多くの使い魔を使役して元素の一族の補佐をするのも役割として負っている」
何も知らないであろう皓に、本来の退魔組織のやり方を語る二人
「……だけだよ、木崎も浄化の一族ってやつなんだろ？ 何で、嬢ちゃんを連れていかねえといけねえんだ？」

皓のさらなる疑問に、朱莉の頬がかつと赤くなると同時に睨みつけてくる。

馬鹿にしたつもりはないのだが、どうやらそう聞こえてしまったらしい事に皓はむっと唸る。

それを見た和義は肩を震わせ、孫娘を見やる。

「他意は無いのだ、そう気にするな」

和義の言葉に、慥然としたまま朱莉は頷く。

しかし、その表情はあまり納得をしていないのがありありと分かるほどしかめっ面である。

その姿に和義は小さく苦笑を零してから、皓と静那を見る。

「これの後学の為、と言う事じゃ。浄化の一族の後を継ぐのであれば、木崎が戦う姿を一度は目にして置くが良いというわしの親心じやのお。それに……使い魔がおろうとも皓殿は退魔の戦いに赴いた事がない。木崎の使い魔達も熟練したものとは言え、やはり人としての補佐があつた方がやり易かるうて」

老婆心だと笑いながら言う和義に腑に落ちない物を感じる皓だが、拒否をしても何しても決定済みなのだから言い出すだけ無駄だと口を閉ざす。

その時、くすくすと笑いながら都が口を開く。

「本音は、朱莉嬢も静那嬢も似た境遇ですから仲良くやっていただけないか、と言う親心ですわ。退魔に深くかわっている者達は義務教育以降、殆どこちらの仕事にかかりきりになってしまいがちで

……同い年で同性のご友人と言うのは出来辛いのです」

都の言葉に、皓は思わず静那と朱莉を見る。

静那はおっとりとしたままだが、朱莉は都の言葉に真っ赤になっている。

「まあ、それならそれで良いんじゃないの？」

皓はあっさりとな得する事にする。

他にも他意はあるかもしれないが、ここで問い詰めた所で素直に言うとは思えないからである。

「とりあえず、今日はこれくらいで良いでしょうか？」

静かに彦哉が口を開き、桂悟もまた頷く。

「そうですね……」

都も同意し、和義も頷く。

「仕事の際は使い魔に連絡を入れる故、それまではゆるりとしちらの事を勉強なされ、皓殿」

そう言って、彦哉は席を立つ。

「木崎の使い魔はかなり優秀故、使い潰し等せぬよう気をつけられよ」

桂悟は忠告らしき言葉を吐き、退出して行く。

「静那嬢、今度わたしどものお仕事場の方へもいらしてね。歓迎しますから」

都は静那にそう言って、微笑んで出て行く。

「では、これから宜しゅう頼むぞ」

「どうぞ、よろしくお願いします」

和義と朱莉はそれだけ言い、奥の部屋へと去って行った。

「はあ………すげえ疲れたなあ、おい」

皓は姿勢を崩し、疲れた様に深い溜息を吐きつつ呟く。

「お疲れ様でした、旦那様」

静那はそう言って、ぺこりと頭を下げる。

「おう、静那もお疲れさん」

皓は静那の様子に思わず苦笑し、頭を撫でる。

「まったく……媚殿は何処までもマイペースと言っか、なんと
言っか」

呆れた声を上げるのはタマで、ポチは苦笑を浮かべている。

「長老方は最高権力者だというのに、良くあそこまで挑発出来るも
のだ」

ポチの言葉に、皓は笑う。

「あれぐらいツラつと流せねえ奴の下で働くのは、ご免だな。その
点でいえば、爺さんと姉ちゃんも合格だな。あの若いのは、もっと
性根を鍛えてから長つてやつになるべきだと思うぜ」

長老たちがいた場所で、堂々と皓はそんな批評をする。

「媚殿が怖いもの知らず過ぎて、これから先が不安ですよ」

タマは思わず額を押さえ、呻く。

「気にすんな。むしろ、気にしたら負けだぞ」

皓はにやりと笑ってタマに言い、足を崩している静那を見る。

「旦那様？」

視線に気がついた静那が、皓を見上げて小首を傾げる。

「静那。お前、なんか変だぞ」

皓の言葉に、静那は数度瞬きをする。

おっとりとした様子だが、その瞳は微妙に揺れている。

顔色も、心なしか悪い様に見える。

「……とつとと帰って、寝た方が良さそうだな」

皓はそう言っ立ち上がり、静那をひょいと抱き上げる。

静那は突然の事に目を丸くして、硬直している。

「静那は具合悪そうだからな、このまま寝てろ」

皓は静那にそれだけ言っ、タマとポチを見る。

見られた二人は慌てて立ち上がり、襖を開き早足に先導する。

皓は静那を落とさないように気をつけながら、それについて行く
のであった。

第十八話（後書き）

いきなり登場人物が増えた様に見せかけて、実はこれから関わるかもしれないから顔見せというお話。

腹黒さ全開っぽい人達との疲れる会話を目指したんですが、翁を目立たせるためのお話になっていたような気がする。

この翁、実は結構お気に入りです。

第十九話

帰りついた時にはかなり遅い時間で、皓は嘆息してしまう。
寝ておけと言われたからか、それとも疲れがあったからか静那は
すやすやと健やかな寝息を立てている。

仕方ないとタマとポチを見ると、ポチは静那の部屋の扉を開けて
促す。

皓は頷き、静那を彼女の部屋へと運び布団に寝かせて直ぐに出る。
ポチが着替えさせている最中に、部屋にいる程皓は無神経ではな
い。

すると、ポチがソファアの横でござごと何かの準備をしている
のが目に入り、小さく嘆息しながらソファアに座る。

昨日まで一人暮らしだった部屋に、三人増えて四人暮らしとなっ
てしまった。

正直、狭い。

そこまで考えた瞬間、はたと思い出す。

「しまった」

思わず口に出して呟くと、タマが顔を上げる。

「如何しました？ 婿殿」

不思議そうに問いかけてくるタマに、澁面を浮かべる皓。

「いや……まあ、良い」

説明しようとはするが、皓は直ぐに頭を振る。

「今すぐ連絡入れ無くても、良いだろう」

小さく呟き、うんと頷く。

そんな皓の様子にタマは、じーっと話すのを待つように見られる。

「……何だよ」

思わず問いかけると、タマは皓の正面に移動する。

「いえ、何か御用があるのかと思ひまして」

タマの言葉に手を振るが、タマは動かない。

何があるのかを話すまで、絶対に動かない上に寝かさないと云う
雰囲気を持って皓を見ている。

そんな夕玉に、皓は眉間に皺をよせて口を開こうとすると、静那
の部屋の扉が開く。

ポチが入ってきたのか皓はちらりとそちらを見ると、静那が浴衣
姿でパタパタと駆け寄ってくる。

しかも、そのまま静那は皓の腕にしがみつく。

「お、おい！」

思わず皓が慌てた声を上げるが、静那はフルフルと頭を振ってま
すます強く腕を抱きしめる。

皓は困惑しながら静那を見ていると、ポチが夕玉の隣に座り苦笑
する。

「お嬢の事は気にせず。それよりも、何か困った事でもあるのか？
婿殿」

ポチの問いかけに、皓は静那をちらりと見て小さく嘆息する。
今にも泣き出しそうな表情で腕にすがりつかれては、皓とて無理
やり引き剥がす事はできない。

仕方が無いと反対側の手で静那の頭を撫でてやりながら、皓は口
を開く。

「まあ、あれだ。同居人が増えるっつゝ事を大家に知らせ忘れただ
けだ」

皓は特に大事なことはない、苦笑しつつ告げる。

「この大家は、そう言うのにうるせえからよ。きちんと連絡入れ
ておかねえと、後で面倒な事になるんだわ」

ちなみに皓が見たのは、隣に住む男が大家に連絡を入れなかった
ばかりに彼の保証人である親に連絡を入れ、結婚したなら知らせて
くれないと困ると苦情を入れた事に端を発する同棲発覚の瞬間であ
った。

その後、彼は同棲相手と結婚してアパートを出て行っている。

同居するにも同棲するにも大家に連絡を入れておかないと、後々

面倒になるのだらうと悟った瞬間であった。

「俺の保証人はばつちゃんだからなあ……」

遠くを見ながら呟き、深い溜め息をつく。

それでなくても静那との同居は、社会的に見たら非常識に分類されかねない物だ。

鬼切の神子の成人年齢は十六歳とタマから教えられた事を考えれば、必然的に静那の年齢は十六歳。

皓の年齢は二十一歳で、世間一般で言えばロリコンと言われかねない状況だ。

そんな状況下で祖母に知られば、責任を取って結婚しろと言われかねないのである。

祖母には家を飛び出す際に色々と迷惑をかけた為、頭が上がりない。

それに、祖母は早く結婚して曾孫を見せろとせつついてくる事もあるのだ。

ここぞとばかりに静那との縁談を進めかねない様な気がするので、予防線を張らなくてはならないだろう。

「まあ、明日だ明日。だからお前……静那もよ、ゆっくり寝ろ」
今日はもう何も無いだろうと、皓は静那の髪を梳く様に頭を撫でながら言う。

しかし、静那はいやいやと頭を振って皓の腕から離れない。

子供の様に聞きわけの無い所作の静那に、皓は何かあったのかとポチとタマを見る。

ポチもタマも心当たりはあるのだが、それを口にするのは躊躇われた為に視線を逸らす。

そんな二人に舌打ちをして、腕に縋り付いたままの静那をどうするかを考える。

正直、眠くなってきている。

だがしかし、静那を放置して寝ればタマとポチが黙っていないだろうし、何よりもここで突き放す気はない。

仕方が無いと、先程からため息と舌打ちの度に揺れる静那の体を引っ張る。

静那は驚いた表情で顔を上げ、皓を見る。

「何かあったのかとか、全部明日聞くからな」

そう言っつて、皓は静那を膝に座らせ子供をあやす様に背中を撫でてやる。

静那は恥ずかしそうな表情を浮かべ、しかし嬉しそうに皓の胸にすりつと頬を寄せる。

まるつきり子供の様なその仕草に皓は呆れた様な、しかし慈しむ様な表情を浮かべてあやす皓。

年齢よりも幼さが際立つが故に、子供に対する庇護欲がそそられ皓は何の抵抗も無く静那を抱き抱えていた。

だがしかし、目を閉じて身を寄せてくる静那は紛れも無く女性で、誘惑する様な甘い香りを纏い、しなやかで柔らかな体を持っている。

皓はそれに気がついた瞬間に拙いと硬直するが、腕の中の静那はもはや夢の世界へ旅立って居た。

物凄く良い寝付きに腹立たしさを覚えるが、これ幸いと皓はタマとポチを見る。

だがしかし、二人はドロンと音を立ててそれぞれ動物の姿へと変じてしまう。

タマは朝と同じスコティッシュフォールドだが、ポチは何処からどう見ても大型犬のシベリアンハスキーだ。

思わず啞然としてしまいが、二頭は特に気にした様子も無くソファアのすぐ横の寢床へと潜り込む。

「おめえら……」

思わず唸る様に呟くと、ポチが顔を上げる。

「媚殿、悪いが今日はお嬢と一緒に寝てくれ」

苦笑する様に目を細め、お願いする。

「あのなあ……てめえら、何考えてんだよ」

静那が大事と言う割に、行動が矛盾していると青筋を立てる皓に

タマの尻尾が揺れる。

「お嬢様は、今日はとても気疲れをしているのですよ」

ツンツと澄ました仕草でタマは言い、体を丸めて寝る体勢を取る。「お嬢は、婿殿が必要なんだ。それは鬼切の神子としての本能なのかもしれない。だが……今は、婿殿の傍で無くては眠れないのだと思う。だから、頼む」

ポチの真剣な懇願に、むっと唸る皓。

そもそも自分だけではなく、静那自身にも環境の変化と言っかなりの負担が強いられていた筈だ。

その上、目の前で見た啓太の罵倒。

静那を静那と言う人間ではなく、道具としてしか見ない輩の言葉。それを思い出した瞬間、皓は気がつく。

自分に来る物だとばかり思っていた、悪意の行方。

腐り、淀み、捻じ曲がってしまった者達が素直に行動する筈など無い。

思い至った考えに、皓はギリツと奥歯を噛む。

「ポチ、静那ん所へ来たのか？」

皓は低い声音で、ポチに問いかける。

ポチは皓の怒気に一瞬体を震わせてから、頷く。

「はい。油断しておりました」

素直に、ポチは自身の責を認める。

静那を護る為にポチは同行していたと言っのに、皓へ意識を割いていた為に気がつくのが遅かったのだ。

「そうか、悪かったな」

皓自身、それを知っているからこそ責める様な事はしない。

責めた所で静那が傷ついた事実は変わらないし、八つ当たりにしかならないからだ。

「まあ、次から気を付けようぜ」

それだけ言っつて、静那を抱き上げる皓。

「ゆっくり休めよ」

皓はタマとポチの返事を聞かずに、自身の部屋に入る。

結局のところ静那と同衾する事になった訳だが、皓は仕方が無いと割り切り布団を捲り静那を寝かせる。

すると、くいつと引つ張られる感覚があり、視線を下げると静那が皓の服を掴んでいた。

「着替えるから、ちつとばかり待ってる」

皓は思わず苦笑して嘸き、さらりと静那の額を撫でる。

すると、静那の手が緩みするりと服が離れる。

実は起きているんじゃないのかと皓は一瞬思ったが、まあ良いかと手早く着替えて静那の隣に体を滑り込ませる。

異性が隣にいると言つのに体を繋げる事も無く、ただ添い寝する等と言つのは酷く久しぶりな気がする。

そんな事を思いつつ静那を見ていると、温もりを求める様に寄り添ってくる。

押し付けられる柔らかかな体に湧き上がる衝動をぐつと堪えて、静那が望む様に抱き寄せて皓は目を閉じる。

さつさと寝てしまわないと、衝動に負けてしまいそうだからだ。

大事にしてやらなければならないと、皓は柄にもない事を考えてから意識を闇に落とすべく羊の数を数え始めるのであった。

第二十話

静那の意識が、ゆっくりと浮上する。

家にいる時は起きたと同時にポチが来るのだが、今日はその気配すらない。

静那は何故起しに来ないのかと不思議に思うが、直ぐに思い出す。昨日から実家を出て、担い手である皓の家に住み込んでいるのだ。静那は小さく、安堵の吐息をつく。

成人してから半年、担い手となる者を見つける事が全く出来なかった。

中々見つけれない期間は、静那にとって針の筵に座っているかのような気持であった。

歴代で、これほど長い期間担い手を見つける事が出来ない鬼切の神子はいなかった。

ポチやタマからは、静那の力が強すぎる故に担い手が中々見つからないのだと言われた。

だがしかし、担い手を探しながらの退魔の仕事の最中では、最も無能な鬼切だと面と向かって罵倒された事は数知れず。

鬼切の神子の力は、その身を退魔の武器に変じてこそ最も効率よく発揮させる。

前の神子を知る者達の中には、静那の様な無能者が何ゆえ鬼切の神子となったのかと、タマやポチに訴えている者もいた。

その光景は、静那の心を引き裂いていた。

しかし、静那は泣く事もせず淡々と彼らの言い分を聞き、ただひたすらに自身の力を強くする為の修行と担い手探しとを続けた。

静那は、自分が無能だと理解していた。

前の神子はとても優秀で有能で、その人を補佐して生きて行くところ自分が求められているのだと知っていたのだ。

だからこそ、自分が鬼切の神子となってしまう事に酷い罪悪感

を抱いていた。

前の神子が春の日差しの如く美しく、優しい女性であった。
それに引き換え、氷刃の様なと評される事の多い我が身。

神子であるのなら、もっと人に安らぎを与えられるような容姿と存在であらねばならない筈なのに、それからすらも逸脱している。

神子の癖に人を安らがせる事も出来ない無能とも言われ続けた事を考えても、やはり自分は本来の神子とは外れた存在なのだろうと理解していた。

それでも尚、憧れた鬼切り神子でありたいと望み続けたが故の咎なのだろうと受け止め続けて来た。

前の神子の様になりたいと望むのは不遜だと判つていても、彼の様に強く、優しく、美しく、聡明になりたかったのだ。

ぎゅつと唇を噛みしめ、静那は優しく包んでくれる主の寝巻を縋りつく様に掴んだ。

第二十一話

意識が浮上したと同時に、腕の中に静那が居るのに気がつく。

一瞬混乱しそうになったが、昨夜の事を思い出したので直ぐに気は落ち着いた。

しかし、静那が小さく肩を震わせている事に、今度は困惑してしまふ。

起きぬけでしかも、腕の中で啜り泣かれても、皓としては困惑しながらも慰める様に頭を撫でてやる事しか出来ない。

昨夜の事が原因やもしれないが、それを今の静那に聞く程皓もバカではない。

嘆息一つでも過剰に反応する静那の事を考えれば、ただこうやって髪を梳くように撫でてやる方が良いだろう。

皓には何があつて、静那がこれ程己に自信が無いのかが分からない。

だが、腕の中で泣く静那の気が済むまで、こうしていてやろうと小さく笑む。

今の静那は異性と言うよりも、庇護してやらなければならぬ幼子の様に見える。

指通りの良い髪を梳きながら、皓は口を開く。

「静那は、昨日から泣きっぱなしだな」

どこか笑んだ声音に、静那の肩が震える。

皓はそんな反応をする静那に苦笑して、ポンポンとあやす様に背中を叩く。

「感情を露わにするつつうのは、良い事だ。心の底から泣いたり、笑ったりするのは心に良いんだぜ？ 泣いた後は、元気になるしな」

ぼん、ぼんと優しいリズムを刻みながら、皓は語りかける。

「なんて言うか……おま……じゃねえ。静那は何でも無理して笑ってるような気がしてな。だから、俺相手にはそんな無理をする必要

はねえって言っていてんだ」

皓の言葉に、静那は顔を上げる。

驚いた様なその表情に、皓は思わず苦笑を浮かべて静那の頭をくしゃりと撫でる。

「俺の前ですつと泣きつぱなしだろ？　そこまで俺に見せてるんだから、気にせず俺に甘えておけ」

皓の優しい言葉に、静那の眦からまた涙が伝い落ちる。

「それに、相棒なんだろ？」

静那は鼻を鳴らし、肩を震わせ嗚咽を零す。

今度は号泣を始めてしまった静那にますます苦笑して、皓は背中をあやすように撫でる。

何を思って泣くのかなど、今は気にしない。

誰でも人に聞かれたくない事の一つや二つ、あるからだ。

言いたくなつた時に、黙って聞いてやるのが自分の役目だと皓は思っている。

問い詰めて聞きだしても、それは今の静那にとってはマイナスにしかないからだ。

静那自身がきちんと気持ちを整理し、言葉に出来ると判断した時に言い出せばいい事なのだから。

泣きじゃくる静那をあやしなから、皓は随分と静那に甘いと自身の思考を思わず笑ってしまう。

交友関係も広く、男女の友人は多い。

しかし、恋愛関係に発展した女性に対しては、皓はあまり優しい方ではなかった。

そもそも何かを強いられる事が嫌いなので、自分の気が向いた時にしか構わない等と言う事もざらであったのだ。

その為、女性が愛想を尽かして去って行く事が多かった。

無論、皓自身好いた女性にはそれなりの対応をしていたのだが、やはり振られる事が多く面倒臭くなって一人で居たのである。

そこに、押し掛け女房の様に目の前に現れた静那。

今まで相手にしてきた女性達とは違い、無垢で清純な少女に、皓は戸惑いしか抱けなかった。

しかし、一日で庇護欲まで生まれ、こうして優しく慰める事など以前の自分であれば考えられなかった。

ただ、この無垢な少女には泣いて欲しくない。

初めて会った時の様に、いや、それ以上に心からの笑顔を浮かべて欲しいと望んでいた。

それがどんな感情なのか、今はまだ分からない。

父性愛なのかもしれない。

もしかしたら、恋愛感情なのかもしれない。

どちらの感情にしろ、皓の望みは一つだ。

「泣くだけ泣いたら、きちんと笑ってくれ。作り笑いじゃねえ、静那自身の心からの笑顔だぞ」

皓の言葉に、静那は俯いたままコクコクと頷くが、静那が顔を寄せている部分のパジャマはますます濡れてくる。

まだ泣きやめない静那の傷に何とも言えない心持になりながら、

皓はそつと静那の髪を梳いて無言で慰めるだけであった。

第二十二話

ようやく静那が落ち着き始めた頃、コンコンと部屋のドアがノックされる。

ぐすぐすと鼻を鳴らしつつ、静那が起き上がろうとするが皓はそれを制する。

「俺が出るから、ちょっと待ってる。絶対布団から出るなよ」
それだけ言っつて、ベッドから出る皓。

静那はどうしてなのだろうと小首を傾げて、皓に箱ごと渡されたティッシュで鼻をかむ。

その間に皓はドアを開け、誰が起こしに来たのかを確認する。

ちなみに、ベッドから声をかけなかったのは変な誤解をされない為である。

ドアを開けると何処となく目つきが怖いタマが立っており、皓は衝動的にドアを閉める。

「ちょ！ 婿殿！？」

扉の向こうのタマが慌てた声を上げつつ、だんだんとドアを叩く。
「うるせえな、何の用だ！」

タマの慌てた声と、ドアを乱打する音に皓は怒鳴りつつ仕方がなくドアを開け、怒鳴る。

「朝だから起こしに来たんですよ！ それより、お嬢様とはもう本契約を！？」

何故か物凄く不穏な目つきをしながら、タマが詰問してくる。

「……あのなあ」

胡乱とした表情を浮かべ、皓はタマを見る。

「お前と言い、ポチと言い……俺をなんだと思ってるんだ？」

青筋を浮かべながら、皓は問いかける。

その表情と声音に、タマは毅然と口を開く。

「お嬢様の婿殿です！」

婿だと言いながら、静那に手を出していたら殺しかねない様な眼をしてるタマに、皓は思わず眉間を揉んでしまう。

「お前、アレか……？ 人の事婿だなんだかんだ言いながら、実は認めてねえだろ？」

皓の言葉に、タマは目を丸くする。

「何をおっしゃいますか！ 貴方ほどお嬢様の婿に相応しい方はおりません！」

慌てた様に言うタマに皓は何かを言おうとするが、止める。

実際問題、彼らにしてみれば“力”と言うもので自分を選んだだけで、人格で選んだ訳ではないのである。

たった一日では、信用はできても信頼できる筈など無いのだ。

そう考えると、何故か酷く疲れた様な心持になる皓。

タマはその表情を見て、憮然とした表情を浮かべながら口を開く。

「……私としては、お嬢様の本契約はまだ早いと思っっているのですよ」

拗ねた様な口調と声音に、皓は目を瞬かせる。

「旧き世代であれば、お嬢様の現在の年齢で御子を生しているのも普通ですが……お嬢様は無垢でその……幼くあられます」

だからつい、過剰に心配してしまうのだとタマは恥ずかしそうに語る。

皓はその過保護な兄の様なタマの姿に啞然とし、次いで苦笑を浮かべる。

「なんだそのシスコンな理由は」

皓の突っ込みに、タマはかっとな頬を赤くする。

「シスコンってなんですか！？ シスコンって！」

タマの突っ込みに手を振り、皓はドアを開けて静那を振り返る。

「ちなみに、静那は起きてるぜ」

皓の一言にタマはきよとんとし、次いで挙動不審になる。

「おっ、おとお嬢様、朝食はどうなさいますか？」

何時も通りの表情を必死で取り繕っているが、声が裏つ返り動揺

を露わしている。

静那はタマの言葉に、あっと声を上げて慌ててベッドから出てくる。

その姿に皓は何とも言えない表情を浮かべ、タマは慌てて背中を向けてポチを呼ぶ。

「ポチ！ お嬢様のお着替えを持ってきてください！ 早く！」

ポチが慌てる理由は、寝起きである静那の恰好である。

静那の寝間着は浴衣らしく、昨夜もそうだった。

となると、寝ている時に乱れるのは必然である。

比較のおとなしめに乱れているのであるうが、胸元が大きく開いており、やや小ぶりの乳房の谷間が見えている。

下の方も合わせ目が乱れており、ちらちらと静那の太ももと下着が覗き見える。

皓は流石に目を逸らし、静那の服を持ってきたポチに彼女を預けてさっさと着替えをする事にする。

ちなみに、居間からタマの慌てた声が聞こえてきたが無視である。取り敢えずラフな格好に着替えてから、一息つこうとベッドに座る。

昨日から、正確には一昨日の夜から変な出来事が目白押し過ぎて、皓の疲れはまだとれていない。

慣れない添い寝などするのでは無かったと思いつながら、昨夜の静那の様子を思い出せば突き放す事も出来なかったと嘆息する。

「はあ……面倒くせえなあ……」

色々な事がいつぺんに襲ってくる事に思わずばやくが、嫌だとは思えなかった。

この不況の中で職にありつけたと言う理由だけではなく、新たな世界への好奇心があったからだ。

しかしそれでも、頭を抱えなくなるのは新たな世界を運んできた者達である。

年齢よりもあどけない表情をする静那。

その彼女を至上とし、護る事に余念のないタマとポチ。

ある意味非常識なこの三人に、頭痛を覚えてしまう。

同時に、彼らをなんとかするのは自分の役目なのだろうと達観してもいる。

追い出してしまえば簡単だが、それをすれば自分の命はないという理不尽な背景も考えれば安易にそんな事はできない。

今現在はマイナス面の方が目につくが、長期的に見ればもしかしたら良い事なのかもしれない。

皓はそう自分に言い聞かせて納得させてからベッドから立ち上がり、朝食をとろうと居間へと扉を開けた。

第二十三話

それから幾日か経ち皓が静那達の存在に慣れた頃、彼の携帯が震える。

誰かからの電話かと思うが、心当たりがない。

大家には気が付いた日の翌日には連絡を入れており、それ以外だとすれば祖母か以前の仕事を先で知り合った知人だろう。

そう思っていると携帯の震えが止まり、着信履歴を見るかと手に取って気が付く。

「マナーモードにしてたのか」

大家に連絡してから勉強などの邪魔になると思い、マナーモードにしてすっかり忘れていたらしい。

皓は苦笑しつつディスプレイを見ると、着信履歴ではなくメールが届いていた。

誰から届いたのか疑問を抱きながらメールの差出人を確認すると知人の名前と、以前に行ったキャバクラのキャバ嬢の名前が載っていた。

「営業メールか……まあ、行かねえしなあ」

携帯を操作して、皓は必要の無いメールの削除をして行く。

他にも、以前の現場でそれなりに親しかった作業員や、現場監督の名前などもありそれをチェックして行く。

いきなりクビを言い渡された為、彼らに挨拶一つする暇も無かったのを思い出し、思わず苦笑する。

ちなみに、彼らのメールの内容は新しい仕事が見つかったのかという心配のメールばかりである。

不況の今、新たな仕事を見つけるのはなかなか難しいのだ。

いきなり辞めさせられたのは結構きつかったが、今は彼らの様に自分の心配をしてくれる人がいる事に心が温かくなる。

一つ一つのメールを確認していると、携帯電話が震え出しディスプレイ

プレイには相手の携帯番号と名前を表示される。

それは、先程削除したキャバ嬢に随分と入れ込んでいた知人の名前前である。

「もしもし」

咄嗟に通話を押し、電話に出る。

「よお、久しぶり」

相手は笑いながら皓に言い、ここ最近電話をしてもメールをしても音沙汰がなかった事を軽くなじる。

「わりいな、俺も忙しかったんだよ」

そう答えつつソファに座り、タマとポチに勉強を教わっている静那に手だけで静かにしている様に指示を出す。

静那はこくりと頷き、高校生用のドリルを埋めていく。

「おお、速攻で次の仕事でも見つけたのか？ 相変わらず、窪は行動が早いなあ」

楽しげに相手は言うが、皓としてはとんでもないおまけ付きで尚且つこれからの人生を質に取られている様なものである。

それを考えたら手放して喜べない訳なのだが、言う必要も無いので皓は苦笑して話を逸らす事にする。

「それより、堂本。何かあったのか？」

そう問いかけると、堂本と呼ばれた彼は向こうで小さく笑う。

あからさまに話を逸らしたのが、どうやら面白かったらしい。

しかし、彼はそれを直ぐに納めて問うてくる。

「窪の方にも、ミヤビちゃんからメール行っただろ？」

突然の質問に意図を読めないまま、皓は頷く。

「ああ、あのキャバ嬢だろ？ 営業だと思って消したけど……それはどうしたんだ？」

チクリと刺さる強い視線に眉を潜めつつ、元凶をじろりと睨みながら相手に問いかける皓。

「いやさ、ミヤビちゃんがNo.2になったらいいんだよな。それで、窪の送別会の二次会で呑みに行こうぜって事になったんだよ。」

あ、無論有志でだけどな。あれだつたら一次会だけで良いから顔出せよ」

堂本の言葉に、皓は悩む。

久々に遊びに行きたいとは、常々思っていた。

何せ、タマが何処からか持ってきた竹刀を使って近所の公園で早朝から素振り。

家に戻って朝食を食べた後は殆ど座学で、物凄い勢いで知識を詰め込まれている。

座学はそれほど嫌いではないが、スパルタで詰め込んでくるタマに正直辟易しているのだ。

そろそろ羽根を伸ばしに、どこかへ行きたい。

「良いぜ、何時飲みに行く?」

皓は即決で、心の洗濯をする事を選ぶ。

タマはその答えに怒鳴ろうと立ち上がるが、皓がそれを手で制して相手に日時を聞く。

「ああ、ああ……分かった。あと、俺持ちで良いから一人連れて行くからな。こいつ、キャバクラ行った事無いらしくて興味津々なだよ」

堂本はそうかと言っただけで了承し、少し雑談話をしてから皓は電話を切る。

「婿殿……何を考えておられるんですか?」

低い声音と、視線だけで人を殺せそうな目つきをしながらタマが問いかけてくる。

「良いじゃねえか、気分転換。まあ、俺としてはキャバクラより居酒屋の方が好きなんだけどよ……」

等と言いつつ、静那を見る。

「詰め過ぎは疲れるだけだしよ。静那も、俺が遊びに行ってる間息抜きとかしとけよ? 日曜日も勉強したら、疲れも取れねえぞ」

潤んだ瞳をする静那の頭を撫で、皓は言い聞かせる。

「んでまあ、明日の夜だけどタマも連れてくからな」

静那に許可を得る様に、しかし問答無用と言った笑みを浮かべて告げる。

「はあ!?!」

タマの素っ頓狂な声にニヤニヤ笑いながら、皓は言う。

「タマは俺のお目付け役なんだろう?」

この一言に、タマはぐうっと唸る。

未だ、皓を一人で行動させる事は出来ない。

理由は、皓が担い手であること以上に“鬼”を一人で相手にするには未熟なのだ。

力はあるても、それを制御する為の知識や経験その物が不足している。

突貫で詰め込んでいても、それをきちんと運営できる程の物ではない事はタマも皓も知っているのだ。

だからこそ、タマが皓の側で彼を補助しなくてはいけない。

「……確かに、気分転換も必要だ」

さらり、とポチが頷く。

だがしかし、その眼は険しい。

「出来ればわたしやお嬢を連れて行ける様な場所での息抜きをお願いしたい訳なのだが、仕方が無い」

本音を口にするポチは、タマを見る。

「嬌殿を頼んだぞ」

本当は行かせたくないと言いつつながら、ポチはそう言う。

「もちろんですよ、ポチ。出来るだけ、早く帰ってきます」

タマはポチに微笑みながら頷き、皓に向き直る。

「では、嬌殿……今日は明日の分まで勉強をしていただきましょう。息抜きの為に取った行動が、自分の首を絞めたと気が付いた皓はうへえと声を上げる。

「あんまり詰め込んで、上手く処理出来ねえぞ」

人間の集中力には限りがあり、それが切れた時にまで勉強などをしても効率が悪いのだ。

皓のその言葉にタマはぎろりと彼を睨みつけ、しかし不肖不精領くしか出来なかった。

文句を言った所で、事実勉強の効率自体は落ちていたのだから。静那がほぼ全くと行って良い程効率が落ちていないのは、何時も通りだからである。

体術などがやや難ありと言う事をポチが言っていたのだが、素人目から見れば十分なのではないかと思う。

静那の身のこなしは、おっとりとした性格とは裏腹に素早い。

それなりに鍛えている皓より、遙かに動きが良いのではないかと考えるほどだ。

「まったく……仕方がありませんね。取り敢えず、明日一日はお休みにします。お嬢様とポチも、ゆっくりと休みましょう」

タマのげんなりとした言葉に、皓はやったとガッツポーズをとり満面の笑みを浮かべる。

休みなしの勉強は、精神的にはかなり辛いものだ。

休憩も許さないタマのせいで、精神的にもかなり疲れ果てて居たので解放されて嬉しいと体全身で喜びを表す皓。

「婿殿……」

胡乱とした表情でタマに名前を呼ばれ、皓は負けずに胡乱とした表情を浮かべて彼を見る。

「何だよ」

皓の表情にタマはしばし押し黙り、ゆっくりと口を開く。

「……キャバクラなどと言う場所に行く様な服は持っていませんよ、私」

思いもよらない事を言われた皓は一瞬考えてから、にやりと笑いながら口を開く。

「俺が服貸してやるから、安心しろ」

皓の答えにタマは若干嫌そうな表情をして、頷く。

「はい、お願いいたします」

声音が洪いのは、本当に行きたくないからなのだろう。

しかし、皓を護衛すると言う役割もあるタマはどんなに嫌であるうともついて行かねばならないのである。

そんなタマの姿に、皓も若干悪い事をしている様な気にもなる。

「まあ、休憩が終わったら勉強すんだろ？ お手柔らかに頼むぜ」

皓の氣遣った言葉に、タマはむっと唸ってから苦笑を浮かべる。

「ええ、婿殿がきちんと覚えてくださらないと困りますからね。後十分ほどは休憩をとりますので、お嬢様の方もご休憩してくださいね」

「はい」

タマの言葉に静那も頷き、お茶を入れに立ちあがる。

皓は静那の背中をぼんやりと眺め、どこか長閑な雰囲気を感じながら大きな欠伸をするのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7502i/>

おにぎりのみこ

2011年5月17日06時24分発行